

# 盲目物語

谷崎潤一郎

青空文庫



わたくし生しょうこく国おうみは近江のくに長浜ながはまざい在いでござりまして、たんじ  
 よう《誕生》は天文にじゆう一ねん、みずのえねのとしでござり  
 ますから、当年は幾つになりますやら。左様、左様、六十五さ  
 い、いえ、六さい、に相成りましようか。左様でござります、両  
 眼をうしなしましたのは四つのとくと申すこととござります。は  
 じめは物のかたちなどほの／＼見えておりまして、おうみの湖うみ  
 の水の色が晴れた日などにひとみに明あこう映うつりましたのを今に覚え  
 ておりまするくらい。なれどもそのうち一ねんとたゝぬあいだに  
 まったくめしいになりました、かみしんじんもいたしましたがな  
 んのきゝめもござりませなんだ。おやは百姓でござりましたが、

十のとしに父をうしない、十三のとしに母をうしのうてしまいまして、もうそれからと申すものは所の衆しゅうのなさけにすぎり、人のあしこしを揉むすべをおぼえて、かつく世過ぎをいたしておりました。ところするうち、たしか十八か九のとしでござりました、ふとしたことから小谷おだにのお城へ御奉公を取り持つてくれるお人がござりまして、そのおかたの肝きもいりであの御城中へ住み込むようになったのでござります。

わたくしが申す迄もない、旦那さまはよう御存知でござりましたよ。うが、小谷の城と申しましたら、浅井備前守長政公のお城でござりました、ほんとうにあのお方は、お歳は若うてもおりっぱな大将でござりました。おんちしもつけのかみ、下野守久政公も御存生でいらつ

しいやいまして、とかくお父子の間柄がよくないと申す噂もうわさも  
 したけれど、それももと／＼は久政公がお悪いのだと申すことで、  
 御家老がたをはじめおおぜいの御家来衆もたいがいは備前どの、  
 方へ服しておられたようでござりました。なんでも事のおこりと  
 いうのは、長政公が十五におなりになったとし、えいろく二ねん  
 しようがつと云うのに元服をなされて、それまでは新九郎と申し  
 上げたのが、そのときに備前のかみながまさとお名のりなされ、  
 江南こうなんの佐々木ぼっかんさい拔関齋の老臣平井加賀守どの、姫君をお迎えな  
 されました。ところが此の御縁組みは長政公の御本意でのうて、  
 久政公が云わば理不尽におしつけられたのだと申すことでござり  
 ます。下野どの、かんがえお考では、江南と江北とは昔からたび／＼いく

さをする、今はおさまっているようなれどもいつまた合戦がおこらないとも限らないから、和議のしるしに江南とこんいんを取りむすんだら、ゆくすえ国の乱れるうれいがないであろうと、左様に申されるのでムりましたけれど、備前守どのは佐々木の家臣の聟となると云うことをどうしてもおよろこびになりませなんだ。

しかし父御ていごのおいつけでござりますから是非なく承引なされまして、ひらい殿のひめぎみを一たんはおもらいになりましたものゝ、そのゝち江南へ出むいて加賀守と父子の盃をしてまいれと云う久政公の仰せがありましたとき、これはいかにもむねんだ、父のめいをそむきかねて平井ふぜいのむこになるさえくちおしいのに、こちらから出かけて行っておやこのけいやくをするなどゝは

以てのほかだ、弓馬の家にうまれたからは治乱の首尾をうかゞつて天下に旗をあげ、やがては武門の棟とうり梁りょうともなるように心がけてこそ武士たるもの、本ほん懐かいだのにと仰おほつしやつて、とうくその姫ぎみを、久政公へは御そう談もなしに里へかえしておしまいにになりました。それはまあ、あまりと申せば乱暴な仕方で、てゝこの御腹ごふくりゆう立なされましたのも御尤もではござりますけれども、まだ十五六のおとしごろでそういう大きなこゝろざしを持つていらつしやると云うのは、いかにも尋常なお方でない、浅井の家をおこされた先代の亮政公に似かよつて、うまれながらに豪傑の氣象をそなえていらつしやる、こういう主君をいたゞけばお家の御運は万々ばんく代だいであらう、まことにあつぱれなお方だと、御家来しゆ

うがみな備前どの、御器量をおしたい申して、てゝごの方へは出ゆつし  
仕するものもないようになりましたので、ひさまさ公もよんど  
ころなく家督をびぜんどのへおゆずりになりました、ごじしんは  
奥方の井の口殿をおつれになって、竹生島ちくぶしまへこもっていらしつ  
たこともあるそうでござります。

けれどもこれはわたくしが御奉公にあがりました以前のことで  
ござりまして、当時は父子のおんなかもいくぶんか和ぼくなされ、  
下野どのもいのくちどのもちくぶ島からおかえりになりました、  
お城でくらししていらつしやいました。長政公は二十五六さいのお  
としてござりましたろうか、もうそのときは二度めの奥方をおむ  
かえになつていらつしやいましたが、そのおくがたと申されま

のが、もつたいなくも信長公のおん妹君、お市どのでござります。  
この御えんぐみは信長公が美濃のくにより御上洛のみぎり、いま  
江州できりようのすぐれた武将と申せば、歳はわかくてもあさい  
びぜんのかみに越すものはあるまじ、ひとえに味方にたのみたい  
とおぼしめされて、なにとぞわが縁者となつてくれぬか、それを  
承引あるうえは浅井と織田とちからをあわせて観音寺城にたてこ  
もる佐々木六角を攻めほろぼして都へ上り、ゆく／＼は天下の仕  
置きも兩人で取りおこなおう、みの／＼にも欲しくばそちらへ進  
ぜよう、またえちぜん越前の朝倉は浅井家とふかい義理のある仲だか  
ら、決して勝手に取りかゝるようなことはしませぬ、越前一国は  
そちらの指図通りと申す誓紙を入れようなど、それは／＼御て

いねいなお言葉がござりましたので、その儀ならばと申すことで、御縁がまとまったのでござります。それにつけても佐々木の家臣の姫君をおもらいなされて抜関齋の下風にお立ちなさるところを、きつくおことわりなされたばかりに、当時しよこくを切りなびけてとぶとりをおとす信長公からさほどこまでにお望まれなされ、織田家のむこにおなりなさろうとは。それもまあ、武略がすぐれていらした故とは申しながら、人は出来るだけ大きな望みを持つべきものでござります。不縁におなりなされました前のおくがたは、ものゝ半年と御一緒におくらしはなかつたそうで、そのおかたのことは存じませぬが、お市御料人ごりようじんはまだお輿入れこしいにならぬうちから世にも稀なる美人のきこえの高かつたお方でござります。

御夫婦なかもいたつておむつまじゅうござりまして、お子たちも  
年子としごのようにお生れなされて、もうそのときに、若君、姫君、と  
りまぜて二三にんはいらつしやいましたかと存じます。いちばん  
うえの姫君はお茶々どのと申し上げて、まだいたいけなお児でござ  
りましたが、このお児が後に太閤殿下の御ちようあいをおうけ  
なされ、かたじけなくも右だいじん秀頼公のおふくろさまとおな  
りなされた淀のおん方であらせらりようとは、まことに人のゆく  
すえはわからぬものでござります。でもお茶々どのはその時分か  
らずぐれてみめかたちがおうつくしく、お顔だち、鼻のかっこう、  
めつきくちつきなど奥方に瓜二つだと申すことで、それは盲もく  
のわたくしにもおぼろげながらわかるような気がいたしました。

ほんとうにわたくしふぜいのいやしいものが、なんの冥加みよすがであゝ  
云うとう貴といお女中がたのおそばちこう仕えますことができまし  
たのやら。はい、はい、左様でござります、まえにちよつと申し  
上げるのをわすれましたが、最初はわたくし、さむらい衆の揉み  
りようじをいたすということでござりましたけれども、城中たい  
くつのおりなどに、「これ、これ、坊主、三味せんをひけ」と、  
みな衆に所望されまして、世間のはやりうたなどをうとうたこ  
とがござりますので、そんな噂が御簾中ごれんちゆうへきこえたのでござり  
ましょう、唄の上手なおもしろい坊主がいるそうなが、いつペン  
その者をよこすようにとのお使いがござりまして、それから二三  
ど御前へうかゞいましたのがはじまりだったのでござります。は

い、はい、いえ、それはもう、あれだけのお城でござりますから、武士の外にもいろ／＼のひとが御奉公にあがっておりますして、猿さ樂がくの太夫なども召しかゝえられておりましたので、わたくしな  
どが御きげんを取りむすぶまでもござりませぬけれども、あゝ云  
う高貴なお方には却つてもござまのはやりうたのようなものがお  
耳あたらしいのでござりましょう。それにそのころはまだ三味線  
がいまのようにひろまってはおりませんで、ものずきな人がぼつ  
／＼けいこをするというくらいでござりましたから、そのめずら  
しい糸のねいろがお気に召したのでござりましょう。さようでご  
ざります、わたくし、このみちをおぼえましたのは、べつにさだ  
まった師しようについたものではござりませぬ。どういふものか生

来おんぎよくをきくことをこのみ、きけばじきにそのふしを取つて、おそわらずともしぜんにうたいかなでるといふ風でござりまして、しやみせんなぞもたゞおりくゝのなぐさみにもてあそんでおりましたのが、いつしか身についた能となつたのでござります。なれどもゝとよりしろうとの手すさびでござりまして、人にきいていたゞくほどの芸ではござりませなんだのに、つたないところがあいきようになりましたものか、いつもおほめにあずかりまして、お前へ出ますたびごと<sup>あちらこちら</sup>にけっこうなかずけ物を下されました。まあその時分は、戦国のことゝて彼方此方にかつせん<sup>あちらこちら</sup>のたえまはござりませなんだが、いくさがあればそれだけにたのしいこともござりまして、殿様が遠く御出陣あそばしていらつしやいますと、

お女中がたはなんの御用もないものですから、つい憂きはらしに  
琴などを遊ばしますし、それから又、ながの籠城のおりなどは気  
がめいつてはならぬと云うので、表でも奥でも、とき／＼にぎ  
やかな催しがあつたりいたしまして、そう今のひとが考えるほど  
おそろしいことばかりでもござりませなんだ。とりわけおくがた  
は琴をたんのうにあそばしまして、つれ／＼のあまりに掻きな  
らしていらつしやいしましたが、そう云うおりにふとわたくしが三  
味線をとつて、どのような曲にでもそくぎにあわせて弾きますと、  
それがたいそう御意ぎよゐになつたとみえまして、器用なものじやと  
云うおことばで、それからずっと奥むきの方へつとめるようにな  
りました。お茶々どのも「坊主、坊主」とまわらぬ舌でお呼びに

なつて、あけくれわたくしを遊び相手になされまして、「坊主、瓢箪のうたをうたつておくれ」と、よくそんなことを仰おつしやつて下さりました。あゝ、そのひょうたんのうたと申しますのは、

忍ぶ軒端に

瓢たんはうゑてな

おいてな

這はせてならすな

こゝろにつれてひよくら

ひよくめくに

と、こう唄うのでござります。

あら美しの塗壺ぬりつぼがさ笠や

これこそ河内陣みやげ

えいころえいと

えいころえとな

傷口がわれた

心得て踏ふまへて

とゝら

えいころえいと

えいころえとな

まだこのほかにもいろ／＼あつたのでござりますが、ふしはおぼえておりましてことばも詞をわすれてしまいました、いやもう年をとりますとたわいのないものでござります。そうするうちに信長公と

長政公と仲たがいをなされまして、両家のあいだにいくさがはじまりましたのは、あれはいつごろでござりましたか。あゝ、姉<sup>あねが</sup>川の合戦が、元亀がなんんでござりますか。こういうことは旦那さまのようにもものゝ本を読んでいらつしやるおかたの方がよく御存知でござります。なんでも御奉公に出ましてから間もないこととでござりまして、不和のおこりと申しますのは、のぶながこうが浅井どのへおことわりもなしに、えちぜんの朝倉どのゝ領分へおとりかけなされたのでござります。いったい浅井のお家と申すのは、先々代すけまさ公のとき、あさくらどのゝ加勢によつて御運をおひらきなされまして、それ以来あさくらどのには恩ぎをうけておられます。さればこそ織田家と御えんぐみのときにも越前

のくにゝは手をつけぬと、信長公よりかたいせいしをおとりになつたのでござりましたが、わずか三ねんとたゝないうちにたちまち誓紙をほごにして、当家へいちごんのあいさつもなく手入れをするとはけしからぬ、信長という奴は軽薄ものだど、だいに御隠居の下野どのが御りつぷくで、長政公の御殿へおいでになりまして、きんじゆう近習とぎま《外様》の者までもおあつめになつて、のぶながの奴、いまにえちぜんをほろぼして此のしろへ攻めてくるであろう、えちぜんのかくにの堅固なあいだに、朝倉と一味して信長を討ちとつてしまわねばならぬと、えらいけんまくでござりましたところが、長政公もごけらいしゆうも、しばらくはことばもござりませなんだ。それはまあ、やくそくをほごにすると云うの

は信長公もわるうござりますけれども、あさくらどのも両家のあいだにやくそくのあるのをよいことにして、織田家へぶれいなしうちをしている。ことに信長公たびくの御上洛にもかゝわらず、一ども使節をさし上げられたこともないので、それでは禁裏きんりさまや公方くぼうさまにも恐れ多い。しよせん織田どのを敵にまわしてはたとい朝倉と一つになつても打ちかつ見込みはござりませぬから、いまの場合はえちぜんの方へ申しわけに千人ばかりも加せいを出して、織田家の方はなんとか巧うまくつくろつておいたらいかゞでござりますと、そう申す人たちが多いのでござりましたが、それをきかれると御いんきよはなお怒おこられて、おのれら、末座のさむらいとして何を申す、いかに信長が鬼神なればとて、親の代からの

恩をわすれ、あさくら家の難儀をみすて、よいとおもうか、そんなことをしたら末代までの弓矢の名折れ、あさい一門の耻辱ではないか、わしはたった一人になつてもさような義理しらずのおくびようものゝ真似はせぬと、まんざをねめつけて威丈いたけだかになられますので、まあ、そう御たんりに仰せられずによく御分別なされましてはと、老臣どもが取りつきまして、おのれら、みな此の年寄りを邪魔にして、皺腹を切らせるつもりじやなど、身をふるわせて齒がみをなされます。総じて老人と云う者は義理がたいものでござりますから、そう仰おつしやるのも一往はきこえておりますけれども、まえから家来どもがじぶんをばかにするといふ僻ひがみをもつていらつしやるどころへ、長政公がせ

つかく自分の世話してやった嫁をきらつてお市どのを迎えられた  
ということ、いまだにふくんでいらしつて、それみたことか、  
おやのいいつけをそむいたればこそこんな仕儀になつたではない  
か、この期ごにおよんであのうそつきの信長になんの遠慮をするこ  
とがある、こうまであなどられながらだまつて引つ込んでいると  
いうのは、おおかた女房のかあいさにほだされて、織田家へ弓が  
ひけぬとみえた、と、いくぶんか長政公へあてつける気味もあつ  
たのでござります。びぜんのかみどのは御いんきよと御けらしいし  
ゆうとのあらそいを無言できいていらしつて、そのときにほつと  
ためいきをなされ、なるほど、ちゝうえの仰せはお道理じや、自  
分はのぶながの躰だけれども先祖以来の恩にはかえられぬ、こち

らへ取つてある誓紙は明日あしたさつそく使者にもたせて織田家へかえしてしまいましたよう、信長いかに虎狼ころうのいきおいにほこつておつてもえちぜんぜいと力をあわせて無二の一戦をいたすならば、やわか彼を討ち取れぬことがござろうぞと、きつぱりと仰せになりましたので、そのうえは仕方なく、みなが決心をかためたのでござります。

しかしそのうちも、いくさひょうじょう評定ひょうじょうのたびごとに御いんきよとながまさ公との御料簡ごりょうけんがちごうて、とかくしつくりいかなんだようでござりました。ながまさ公は名将のう器つわでいらつしやいますし、ゆうきりんくたる日ごろの御きしようでござりますから、出足であしのはやい信長をてきに廻してこうゆるくとしてはなら

ぬ、こちらから逆にせめのぼつて一とかつせんした方がよいと、  
そう云うおかんがえでござりましたけれども、御いんきよは年よ  
りのくせで、なにごとにも大事をとろうとなされますので、かえ  
つて不利をまねくようになりました。信長公がえちぜんから都へ  
引きとられましたときにも、此のあいだに朝倉ぜいと一手になつ  
て、美濃へきり込んで、岐阜をせめおとしてしまおう。さすれば  
信長さつそくに馳せくだらうとするであろうが、江南には佐々木  
ろつかく《六角》の一族がいるからやすく通すはずはあるまい  
し、そのまに岐阜から取つてかえして、佐和山おもてにまちかま  
えてかつせんすれば、のぶながのくびはわがものになると、長ま  
さ公がごふんべつをめぐらされ、あさくらどのへ使者をおつかわ

しになりましたけれども、一乗の谷の館やかたにもやはり気ながな人たち  
ちがそろっていまして、はる／＼みのへ出かけていつてあとさ  
きを敵につゝまれたら難儀になろうと、義景公をはじめだれも同  
心するものがござりませなんだ。それで御返事には、いや、それ  
よりも、いずれ信長が小谷のお城へおしよせてまいりましようか  
ら、そのとき当国のにんずをもよおしてお味方に参じましよう  
と、そういうごあいさつでござりましたので、あたら《可惜》ごけい  
りやくがむやくになったのでござります。長政公はそのへんじを  
きかれると、あゝ、朝倉もそんな悠長なことを申しておるのか、  
それで義景のじんぶつもわかった、そのようなのろまなことであ  
のすばしっこい信長に勝つみこみなど、十に一つもあろうとはお

もわれぬ、父上の仰せがあつたばかりによしない人に組みしたのが運のつきだと、しみ／＼述懐あそばしたそうでござりますが、もうそのときから浅井の家もわがいのちも長いことはあるまいと、かくごをきめられたらしゆうござります。

それから姉川、さかもとの合戦がござりまして、いちどは扱いになりましたけれども、たちまち和議もやぶれてしまいました、織田ぜいのためにじり／＼と御りようぶんを削けずられてゆきました。

まことに名将の仰おつしやつたことにまちがいはなく、長政公のことばがおもいあたるのでござります。わずか二三ねんのあいだに、佐和やま、よこやま、大尾、あさづま、宮部、山本、大嵩の城々をおい／＼にせめ抜かれて、小谷の本城ははだか城にされ、

その麓まで敵がひしくと取りつめてまいったのでござります。  
よせては六万余騎のぐんぜいをもつて蟻のはいでるすきまもなく  
とえはたえ十重二十重に打ちかこみ、のぶなが公をそうだいしようとして、  
柴田しゆりのすけ、にわ五郎ざえもん、佐久間うえもんのじよう  
など、きこゆるゆうしが加わつておりました。太閤でんかも当時  
は木のした藤きちろう《吉郎》と申されて、おしろから八丁ばか  
りの虎御前山にとりでをきずいて、城内のようすをうかゞつてお  
られました。あさいどのゝ御けらいにもずいぶんりっぱな大将た  
ちがおられましたけれども、これはとたのみきつたる者もこゝろ  
がわりがいたしまして、だんゝ織田どのへ降人に出まして、味  
方のいきおいは日にまし弱るばかりでござります。おしろの中は、

人質のおんな子供をとりこめてありますし、ほう／＼の小城から落ちてまいった侍どもがおりますし、つねよりもおおぜいの人に数んずでござりましたから、さいしよはなかく／＼気が立っております、

「憂きも一時うれしさも思ひさませば夢候そろよ」と、小唄まじりに日ごと夜ごとのせりあいをつゞけておりましたが、そのうちに、御いん居ひさまさ公の丸まると長政公の丸のあいだの、中の丸をあずかつておられた浅井七郎どの、おなじく玄蕃のすけどのなどが、藤吉郎どのにないつうしまして、てきをその丸の中へ引き入れましたので、俄かにじょうちゆうが火のきえたようになりました。そのときのぶなが公のお使者がみえて申されますのに、その方と仲たがいをしたというのも元はといえは朝倉のことからだ、

しかしこちらはすでに越前をきりなびけ、義景をうちとつてしま  
 ったから、その方にたいしなんの意趣いしゆをもいだかぬし、又そのほ  
 うもこのうえ義理をたてるところもないであろう。しろをあけわ  
 たして立ちのくならば、えんじやのよしみもあることだからこち  
 らも如じよさい在いには存ぞくぜぬ、このゝち織田家の麾下きかにぞくして忠節を  
 ぬきんでゝくれるなら、大和一国をあておこのうてもよいとおも  
 うがと、ねんごろな御ごしやう誼うでござりました。おしろの中ではよい  
 ところへ扱いがはいったと云つてよろこぶ者もあり、いやゝゝ、  
 これは織田どのゝほんしんではあるまい、妹いもうと御ごのおいちどの  
 を助けだしておいてから、殿にお腹をめさせようと云う所存であ  
 ろうと申す者もあり、評議はまちゝでござりましたが、ながま

さ公は使者にたいめんあそばして、おこゝろざしのほど忝く存じ  
ますけれども、かようになりはてゝ何を花香かこうと世にながらえまし  
よう、たゞ討死をとげるつもりでござりますから、御前ごぜんへよきな  
にお伝え下されと仰つしやつて、いっこうに承引なされませなん  
だ。のぶなが公は、さては自分を疑うとみえる、こちらはしんじ  
つに申すのだから、ぜひ討死をおもいとまつて、こゝろやすく立  
ちのくようと、さいさん使者をよこされましたが、いったん覚  
悟をきわめたうえはと、いかに申されてもおきゝ入れがござりま  
せなんだ。それで、八月二じゅうろくにちの宵に、御菩提寺の雄  
山わじよう《和尚》をおまねきになりました、小谷のおくの曲谷  
のいしきりに石塔をお切らせになり、徳勝寺殿天英宗清大居士と

かいみようをえりつけられ、その石とう《塔》のうしろをくぼめて御自筆の願書をおこめになりました。それから二十七日のあさはやくろうじょうの侍どもをおあつめになり、ゆうざんわじょうを導師にたゝせて、長政公はせきとうのそばにおすわりなされ、御けらいしゅうの焼香をおうけになりました。みななしゅうはさすがに辞退されましたけれども、たつてのおことばゆえ焼香したのでござります。さてその石塔は、しので城からはこび出しまして、みずうみのそこふかく、竹生しまから八丁ばかりひがしの沖へしずめましたので、それを見ました城中のものどもは一途いちずに討ちじに心をかけるようになったのでござります。

おくがたはちようどそのとの五月に若君をおうみなされ、さん

ごのおつかれで一と月あまりひきこもっていらつしやいましたの  
で、わたくしがしゞゆうごかいほう申し上げ、お肩やお腰をさす  
りましたり、せけんばなしのお相手をつとめましたりいたしまし  
て、おなぐさめ申しておりました。左様でござります、ながまさ  
公は御きしようはたけくいらつしやいましたが、おくがたにはい  
たつておやさしゆうござりまして、ひるはいちにち命をまとは  
げしい働きをなさりながら、おくごてんへおこしになりますと御  
きげんよく御酒ごしゆをきこしめされ、何くれとおくがたをいたわつて  
お上げなされて、お女中がたやわたくしどもへまでじようだんを  
仰おつしやつたりしまして、いくまんの敵がしろのぐるりをかこん  
でいることもとんとお心にとまらぬようでござりました。なにぶ

ん大名がたの御夫婦仲のことは、おそばにつかえております者にもなか／＼わかりかねますけれども、おくがたはおん兄君と殿さまのなかにはさまれて胸をいためていらしたのでござりましようし、ながまさ公の方はまた、それをいとおしゅう、いじらしゅうおぼしめされ、かたみのせまいおもいをせぬようと、つとめておくがたの気をひきたてゝいらしたのではござりますまいか。そう云えばあのじぶん、御前にひかえておりますと、「これ坊主、三味せんもゝう面白うない、酒のさかなにもつとうき／＼したことはないか、あの棒しばりを舞ってみせぬか」などゝ殿のおこえがかゝりまして、

十七八は

竿にほした細布

とりよりや

いとし

たぐりよりや

いとし

糸よりほそい

腰をしむれば

たんとなほいとし

と、つたないまいをごらんに入れては御座興をつとめたものでござります。それはわたくし、じぶんでかんがえ出しました道化どうけたまいでござりまして、「糸よりほそい腰をしむれば」と、所作しよさを

しておめにかけますと、たいていのかたは腹をかゝえてわらわれますので、めくらのくせに妙なてつきで舞いますところがおかしみなのでござりましたが、なみいるかた／＼の賑やかなおこえにまじつて、おくがたのおわらいなさるおこえがきこえますときは、「あゝ、すこしはごきげんがよいのだな」とおもひまして、どんなにわたくしも勤めがいがありましたことか。なれどもたいへん悲しいことには、おい／＼日がたつにつれまして、いくらわたくしが新しい手をかながえましておもしろおかしくまつてごらんにいれましても、「ほゝ」とかすかにえまれるばかりで、やがてそれさえもきこえないことがおおくなつてまいりました。

あるひのこと、あまり肩がこつてならぬから、すこしりょうじを

してほしいと仰つしやいますので、おせなかの方へまわりまして揉んでおりますと、おくがたはしとねのうえにおすわりなされ、

きようそく

脇息

におよりあそばして、うつらく／＼まどろんでいらつしや

るのかと思われましたが、そうではなくて、とき／＼ほつとといきをつけていらつしやいます。こういうおりに、いぜんにはよくお話相手をいたしましたのに、ちかごろはめつたにお言葉のさがることなどもござりませんので、たゞかしこまつてりようじをいたしておりますたけれども、それがわたくしにはなんとこのう氣づまりでなりませんだ。ぜんたいめしいと申すものは、ひといちばいかんのよいものでござります。ましてわたくしは、ひごによごと奥がたのあんまを仰せつかりまして、おからだの様子がお

およそ分っておりますので、おむねのなかのことまでがしぜん  
手先へつたわつてまいりますせいか、だまつて揉んでおりますう  
ちに、やるせないおもいがいつぱいにこみあげてまいるのでござ  
ります。当時おくがたは二十をふたつみつおこえなされ、四人に  
あまるお子たちの母御は、ごでいらつしやいましたけれども、根がおう  
つくしいおかたのうえに、ついぞいまゝでは苦勞という苦勞もな  
されず、あらいかぜにもおあたりなされたことがないのでござり  
ますから、もつたいないことながら、そのにくづきのふつくらと  
してやわらかなことゝ申したら、りんずのおめしものをへだてゝ  
揉んでおりますも、手ざわりのぐあいがほかのお女中とはまる  
きりちがつておりました。もつともこんどは五たびめのお産でござ

ざりましたから、さすがにいくらか窶やつれていらつしやいましたものゝ、おやせになればおやせになるので、その骨ぐみの世にたぐいもなくきやしやでいらつしやることはおどろくばかりでござりました。わたくし、じつに、このとしになりますまで、ながねんのあいだもみりようじを渡世とせにいたし、おわかいお女中さまがたをかずしれず手がけてまいりましたが、あれほどしなやかなからだのおかたをいろいろたことがござりませぬ。それに、おんはだえのなめらかさ、こまかさ、お手でもおみあしでもしつとり露をふくんだようなねばりを持っていらしたのは、あれこそまことに玉はだえの肌と申すものでござりましょうか。おぐしなども、お産をしてからめつきりと薄うなつたと、ごじゝんでは仰つしやつていらつ

しやいしましたが、それでもふさ／＼とうしろに垂らしていらつしやるのが、普通のひとにくらべたらうつ鬱とう陶しいくらいたくさんにおありになつて、一本々々きぬいとをならべたような、細い、くせのない、どつしりとおもい毛のたばが、さら／＼と衣きぬにすれながらお背なかいちめんにひろがつておりました、お肩を揉むのにじやまになるほどでござりました。なれども、このとうとい上じよようろううろう藤のおみのうえもおしろがらくじようするときはどうなるだろうか。このたまのおんはだえも、たけなすくろかみも、かぼそいほねをつゝんでいるやわらかい肉づきも、みんなおしろのやぐらといつしよにけぶりになつてしまふのだらうか。ひとのいのちをうばうことがせんごくの世のならないなればとて、こんないたい

けなおうつくしいかたをころすという法があるものだろうか。のぶなが公もげんざい血をわけたいもうと御ごを、たすけておあげなさろうというおぼしめしはないものか。まあわたくしのようなのが、そんなしんぱいをしましたからとておよばぬことでござりますけれども、えんあつておそばにおつかえ申し、なんのしあわせかめしいと生れましたばかりにこのようなおかたのおんみに手をふれ、あさゆうおこしをもませていたゞいておりました、たゞそれのみをいきがいのある仕事とぞんじておりましたのに、もうその御奉公もいつまでだろうかとかんがえましたら、このさきなんのたのしみもなくなりまして、にわかに胸がくるしゅうなつてまいりました。するとおくがたが又ほつとためいきをあそばして、

「弥市」

と、およびになるのです。わたくし、おしろの中では、「坊主、坊主」といわれておりましたが、「たゞ坊主ではいけぬ」と仰っしゃって、おくがたから「弥市」という名をいたゞいておったのでござります。

「弥市、どうしたのだえ」

と、そのときかさねてのお言葉に、

「はっ」

と申して、おどくいたしておりますと、

「いっこう力がいらぬではないか、もそつときつうもんでおくれ」

と仰つしやるのでござります。わたくしは、

「おそれいりました」

と申しあげて、さてはいらざる取りこしくろうに手の方がおろそかになったかと、氣を入れかえてせつせともんでおりました。なれどもきようはとくべつにお肩がこつていらしつて、おんえりくびのりようがわに手毬ほどのまるいしこりがおできになつておりまして、もみほごすのがなか／＼なのでござります。まあ、ほんとうに、これではさぞかしおつらからう、こんなにおこりになる擬というのは、きつといろ／＼なものあんじをあそばして、よるもろく／＼おやすみにならぬせいではないか、おいたわしいことだわいと、お察し申しあげておりますと、

「弥市」

と仰っしゃって、

「お前、いつまでこのしろのなかにいるつもりなのだえ」と、仰っしゃるのでした。

「はい、わたくしは、いつまでもも御奉公をいたしておりとうござります。ふつゝかなものでござりますから、おやくにはたちませぬが、ふびんにおぼし下されまして召しつかつていたゞけましたら有りがたいこととござります」

そう申しあげましたら、

「そうかえ」

と仰っしゃったなり、しばらくしずんでいらして、

「それでもお前、知つてのとおりおおぜいの者がいつのまにか一人へり二人へりして、もうおしろにはいくにんも残つていないのですよ。りっぱな武士でさえ主しゆうをみすて、おちてゆくのに、さむらいでもないものがたれにえんりよをすることがあろう。ましておまえは眼不自由がふじゆうなのだから、まご／＼しているとけがをしますよ」

と仰つしやるのです。

「おおせはありがとうござりますが、おしろを捨てるのもふみとゞまるのも、それはひと／＼のこゝろまかせでござります。まなこさえあいておりましたら、夜よるにまぎれておちのびることもできましようけれども、このように四方をかこまれておりましたはた

といおいとまをいたゞきましてもわたくしには逃げるみちがござりませぬ。どうせ数ならぬめくら法師ではござりますが、なまなかてきにとらえられてなさけを受けるのはいやでござります」

すると、なんともおことばはなくて、そつとおんなみだをおふきになつたらしゆう、ふところからたとうがみをお出しになるおとがさら／＼ときこえました。わたくし、じぶんの身よりもおくがたはどうあそばすおつもりか、いずこ迄もながまさ公とごいっしよにおいであそばすのか、五人のお子たちをいとおしゆうおぼしめしたら、また御りようけんもおありになりはしないかと、ころではやきもきいたしましたが、そんなことをさしでがましゆう伺うわけにもまいりませぬし、それきりおこえもかゝりませぬの

で、ついつきほがなくて、ひかえてしまったのでござりました。

それが、あのせきとうの御供養のありました二日ほどまえのこと  
でござりまして、八がつ二十七日のあけがた、さむらいがたの焼  
香をおうけになりますと、こんどはおくがたや、お子たちや、腰  
元衆や、わたくしどもまでをそこへおめしになりました、「さあ、  
おまえたちも回向をしておくれ」と仰っしゃるのでござりました。  
なれどもいざとなりますと、お女中がたのかなしみは又かくべつ  
でござりまして、あゝ、それではいよくお城のうんめいがきわ  
まって、とのさまはうちじにあそばすのかとどなたも途方にくれ  
るばかりで、一人もしようここの席へすゝもうとはなさりませぬ。  
このにさんにち寄せ手は一そうはげしくせめてまいりまして、ひ

るもよるも合戦のたえまはござりませなんだが、けさはさすがに敵もいくらか手をゆるめたとみえまして、お城のうちもそともしんとして、大ひろまの中は水をうったようにしずかでござります。おりふし秋もなかばのこととござりまして、おうみの国もほつこくにちかい山の上の、夜もあけきらぬほどの時こくでござりますから、まつぎにひかえておりますと、肌さむいかぜがひえ／＼と身にしみ、お庭の方でくさばにすだくむしのねばかりがじい／＼ときこえるのでござります。と、ふいに広間のすみの方で、どなたか一人しく／＼とすゝりなきをはじめましたら、それまでじつとこらえていらしたおおぜいの衆が、あちらでもこちらでも、いちどにしく／＼と泣き出されましたので、がんぜないお子たち

までがこえをあげてお泣きになりました。「これ、これ、そなたはいちばんとしかさのくせに泣くということがありますか、かね／＼云うてきかせたのはこのことではありませぬか」と、おくがたはこんなときにも取りみだした御様子がなく、しっかりとしたおこえでお茶々どのお叱りになつて、嫡男万福丸どの、乳母<sup>うば</sup>をお呼びになりました、「さあ、和子<sup>わこ</sup>から先にしようこうをするのですよ」と仰つしやるのです。それでいちばんに万福丸どの、二ばんには当歳の若<sup>わか</sup>が御焼香をすまされますと、「お茶々、そなたの番ですよ」と仰せられましたか、

「いや、姫よりもそなたはなぜしないのだ」と、ながまさ公がきつとなつて仰せられるのでした。おくがたはたゞ「はいく」と

口のうちに仰っしやるばかりで、なか／＼承引なされませぬので、  
 「あれほど申しきかせたことがなせ分らぬ。この期ごにおよんで云  
 いつけにそむくつもりか」と、つね／＼おくがたにはおやさし  
 いおかたが、ことさらあら／＼しく仰っしやるのでござりますけ  
 れども、

「おぼしめしはかたじけのうござりますが」

と、かたくけっしんをあそばして、座を立とうとはなさりませな  
 んだ。そのときながまさ公はだいおんをおあげになつて、

「やあ、その方おんなのみちを忘れたか。わがなきあとの菩提を  
 とぶらい、子どもものせいじんをみとゞけるこそ、つまたるものゝ  
 勤めではないか。そのの道理がわからぬようではみらい永劫い劫えい劫ごう劫

妻とはおもわぬ、夫とも思つてもらわぬぞ」

と、するどくお叱りになりました。そのおこえがひろまのすみ／＼へりん／＼とひゞきわたりましたので、いちどうはつといたしまして、どうなることかといきをころしておりますと、しばらくなんのものおともござりませなんだが、やがてさやく／＼と畳のうえにお召しものゝすれるけはいがいたしましたのは、こゝろならずも奥がたがごしよう香をなされたのでござりました。それから一のひめぎみのお茶々どの、二の姫ぎみのおはつどの、三のひめ君の小督こさくどのと、しだいに御えこうをなされましたので、そのよのかた／＼もとゞこおりなく済まされたのでござります。さてその石とうをはこび出してこすいにしずめましたことは、せ

んこく申し上げたとおりでござります。おくがたはひと／＼の手まえ、いったんはおきゝいれになりましたものゝ、殿が御しようがいあそばすのに、わがみひとり世にながらえてなんとしようぞ、あれこそ浅井のようぼうよと人にうしろゆびをさゝれるのはくちおしゆうござります、ぜひ死出のみちづれをさせて下されと、よもすがら掻きくどかれて、いつかな御しよういんなさるけしきもなかつたそうにござります。するとあくる二十八にちの巳みの刻ごろに、織田どのゝおんつかい不破河内のかみどのが三度目におこしになりました、いま一ぺんかんがえなおして降人に出る気はないかと、のぶなが公のおことばをつたえましたのでござります。ながまさ公はかさね／＼のおぼしめし、しよう／＼世

々わすれがたくは存じますが、じぶんはどうあつてもこのしろに  
おいてはらを切ります、たゞし妻とむすめどもはおんなのことな  
り、のぶなが公にちすじのつながるものどもでござれば、申しふ  
くめてあとより送りとゞけます、せつかくのおなさけにあのもの  
たちのいのちをゆるして、あとくのせわを見てやつて下されば  
ありがとう存じますと、いんぎんにおたのみなされまして、一と  
まずかわちの守どのおかえしになり、それから又おくがたへだ  
んく御いけんをなされたらしゆうござります。もとよりなが  
まさ公とても、あれほどおむつまじいおん語らいでござりました  
から、死なばもろともと覚悟をなされたおくがたのおんこゝろね  
を何しに憎く思しめしましょう。おもえばおふたりが御えんぐみ

をあそばしてから、ことしで足かけ六ねんと申すみじかいおんち  
ぎりでござります。そのあいだしゅう世の中がさわがしく、あ  
るときはとなく都や江南の御陣へお出かけになったりしまして、  
いちにちとしてあんらくにおすごしあそばしたこともないのでご  
ざりますから、おなじはちすのうてなの上でいつまでも仲よろこ  
らしたいとおのぞみになるのも、決してごむりではござりませぬ。  
なれどもながまさ公は勇あるおかたのつねとしてひとしおおん憐  
れみがふこうござりまして、おとしのわかいおくがたをむぎく  
ころしてしまふことがあまりおいたわしく、なんとかしていのち  
をたすけてあげたいとおぼしめされ、ことにはお子たちのゆくす  
えなども御あんじあそばしたのでござりましょう。まあいろく

にしなをかえて道理をおとぎになつたものとみえまして、よう／＼おくがたも御とくしんあそばし、ひめぎみばかりをおつれになつておさとへお帰りあそばすことにきまつたのでござります。おとこのお子たちはまだいとけのうござりましたけれども、敵の手におちてはあやういと申されて、総りようのまんぷく丸どのはえちぜんつるがごおりのくに敦賀郡のしるべをたよりに、二十八日の夜よるおそく、きむら喜内之介と申す小姓をつけてそつとおしろからお出しになり、すえの若ぎみは、当国の福田寺へあずけられることになりまして、これもその夜よのうちに、小川伝四郎中島左近と申すさむらい二人に乳母がつきそうて、ふくでん寺のちかくの湖水のきしに船をよせられ、しばらく蘆のしげみのあいだにひそんでおられた

と申すことでござります。

おくがたは二じゆうはち日の夜ひとよ、ながまさ公とおんわかれの盃をおかわしになりましたが、つきぬおん名残りにさま／＼のおんものがたりをあそばすうちに、秋の夜ながもいつのまにかあけてしまいましたので、それではと申されて、ひがしの方がもうしら／＼とあかるい時分、おしろの門からおのりものにおめしになりました。つゞく三つのお乗りものにはさんにんの姫たちが乳母とごいっしょにお召しになりました、藤掛三河守と申す、お輿入れのおり織田家からついてまいりました奥向きの御けらいが、てぜいをつれて前後をおまもり申し上げ、そのほかに二三十人のお女中がたがおともをいたして小谷をあとなされました。

ながまさ公は御のりものゝきわまでおみおくりに出られました、そのあさはもうこれを最後の御しようぞくで、くろいとおどしのおんよろいにきんらんの袈裟けさをかけていらしたそうでござります。いよゝおのりものをかき上げますとき、「ではあとをたのんだぞ、たっしやでくらせよ」とおことばをおかけになりましたのがゆうきのはりきつたさわやかなおこえでござりました。おくがたも「おこゝろおきのう御りっぱなおはたらきを」と、氣じょうにおっしやつて、おんなみだをおみせにならずに、じつとがまをなされましたのはさすがでござります。すえのおふたりのひめぎみたちは西もひがしもおわかりにならぬほどでござりましたから、お乳ちの人の手におだかれになって、なんのことも夢中で

いらつしやいましたけれども、おちや／＼どのはて、父御この方をふりかえり／＼、いやじゃ／＼ときつうおむずかりになりました、なか／＼なだめすかしてもお泣きやみになりませんので、お供のひと／＼はそれをみるのが何よりつろうござりました。この姫たちが三人ながらのちに出世をあそばして、お茶々どのが淀のおん方、おはつどのが京極さいしようどの、おん奥方常高院どの、いちばんすえの小督こさくどのが忝くもいま將軍家のみだいでおわしますことを、だれがそのときおもいましたでござりましょう。かえす／＼も御運の末はわからぬものでござります。

のぶなが公はおいちどのや姪御たちをお受けとりになりますと、たいそうおよろこびになりました「ようふんべつして出て来てく

れた」と、ねんごろに仰つしやつて、「あさいにもあれほどことばをつくして降参をすゝめたのに、どこまでもきゝ入れないのは、あつぱれ名をおしむ武士とみえた、あれを死なすのはじぶんのほんいでないけれども、ゆみやとる身の意地であるからかんにんしてもらいたい、そなたもながのろうじようでさぞくろうをしたことだろう」と、そこは骨肉のおんあいだがらゆえ御じようあいもかくべつで、わけへだてないおものがたりがござりまして、すぐに織田こうずけの守どのへおあずけなされて、よくいたわつてとらせるようにとの御<sup>ごじよう</sup>誼でござりました。

いくさの方は二十七にちのあさからやんでおりましたが、おいちどのをわたしたうえはもはや猶予することはない、しろをひとい

きにもみつぶして浅井おやこに腹をきらせるばかりだと、のぶな  
が公おんみずから京極つぶら尾というところへおのぼりになつて  
そうぐんぜいに下知げちをなされ、ひらぜめにせめおとせとおつしや  
いましたので、えい、えい、おう、と、寄せ手はすさまじいとき鬨の  
こえをあげて責めにかゝつたのでござります。このとき御いんき  
よ久政公の丸にはぞうへい八百ばかりこもつておりまして、四方  
の持ちくちをかためておりましたけれども、てきは眼にあまる大  
軍のうえに、しばた修理しゆりのすけどのがさきにたつて塀に手をかけ、  
ひた／＼と乗りこんで来られましたので、ごいんきよもいまはこ  
れまでとおぼしめされ、いのくちえちぜんの守どのにしばらく寄  
せ手をさゝえさせて、そのまに御しようがいなされました。御か

いしやくは福寿庵のでござります。鶴松太夫と申す舞のじょうずもおりましたが、いつもお供をおおせつかつておりましたおなさけにこんども御しようばんをさせていたゞきますと申して、おさかずきをいたゞいて、ごさいごをみとゞけてから、ふくじゆ庵どのゝ介錯をつとめ、じぶんはお座敷よりいちだん下の板じきへさがつて腹をきりましたそうにござります。そのほか井口どの、赤尾与四郎どの、千田うねめのしょうどの、脇坂久ぎえもんどの、みなさま自害なされました。この御いんきよはおとしをめしていらしたのにお気のどくなてんまつでござりましたけれども、かながえてみればすべて御自分がわるいのでござります。こう云うはめにならないうちに、はやく長政公のおことばにしたがわれて

朝倉どのおみかぎりなされたらようござりましたのに、おだどの、御うんせいをみぬく御がなりきもなく、よしないぎりをおたてになつてあえなくおはてになりましたのは、たれをうらむことがござりましょう。そればかりか、かつせんの駈けひき、出陣のしおどきについても、御いんきよろしく引つこんでいらつしやればよいものを、いち／＼出しやばつて長政公のごけいりやくをじやまなされ、勝つべきいくさにおくれをとつて、みす／＼御運をにがしたこともいくたびだつたでござりましょう。おだどのがて天んまはじゆん旬のいきおいを持つておられたからとて、ながまさ公のさいはいにおまかせになつていらしたら、これほどのことはござりませなんだ。されば浅井のお家は、一代のすけまさ公、三

代のながまさ公、ともにぶそうのめいしようでいらつしやいましたのに、二代の久政公の御りようけんがつたなく、御思慮があさかったばかりにめつぼうをまねきました。それをおもえば長政公こそおいたわしゆうござります。あわよくば信長公にとってかわりてんがのしおきをなさる御器量をもちながら、おやごのいいつけをおまもりなされて、御じぶんで御じぶんのうんせいをおちぐめなされました。わたくしどもが考えましてさえ齒がゆうて齒がゆうて、あきらめきれないのでござりまするものを、おくがたのおむねのなかはどれほどでござりましたことか。なれどもそれも御孝心のおふかいせいでござりましたので、まことにせひがござりませぬ。

御隠居のまるのおちましたのは二十九にちの午うまのこくごろでござ  
りまして、それから、柴田、木下、前田、佐々の手のものども  
が一つになつて御ほんまるへおしよせました。ながまさ公はお手  
まわりの小姓五ひやくばかりできつてゞられさん／＼にてきを  
なやましてさつとお引きになりましたので、よせてはくろけむり  
をたてゝ無二むさんにせめましたけれども、塀へとりつこうとす  
るものを突きおとしはねおとし、てきを一人も丸のなかへ入れま  
せなんだ。それで二十九にちのよるは寄せ手もせめあぐんできゅ  
うそくいたしまして、あくる九月ついたちにまたせめてまいりま  
した。ながまさ公はそのときまで父の御さいごを御存じなく、

「下野守どのはどうなされた」と小姓におたずねなされましたと

ころに、「ごいんきよはさくじつ御しようがいでござります」と  
 申しあげるものがおりましたので、「そうとはゆめにも知らなん  
 だ、それをきくからは此の世になんのみれんがあるう、ちゝうえ  
 の弔とむらいがつせんをしていさぎよくおあとを追うばかりだ」と、巳  
 の刻ごろに二ひやくばかりで切つて出られ、むらがるてきをきり  
 ふせく、一とあしもひかずたゝかわれましたが、柴田木下のぐん  
 ぜいが稲麻竹葦とうまちくいと取りかこみ、味方はわずか五六十人になり  
 ましたので、一文字にかけちらし、御ほんまるへ馳せいろうとな  
 されますうちに、敵は御ほんまるをのつとつて中から門をかため  
 てしまいましたので、御門の左わきにある赤尾みまさかのかみ美作守どのゝ  
 屋形やかたへおのがれになりました、やがてお腹を召されました。御か

いしやくは浅井日向守<sup>ひゆうがのかみ</sup>。お供をいたしたひと／＼は、日向

のかみをはじめとして、なかじましん兵衛、なかじま九郎次郎、  
 きむらたろじろう、木むら与次、浅井おきく、わきざかさすけ、  
 などのかた／＼でござります。てきは信長公のおおせをうけて、  
 なんとかしてながまさ公を生けどりにしようとしたのだそうでご  
 ざりますけれども、きこゆる剛将がひつしのはたらきのゆえにそ  
 んなすきはござりませなんだので、あとから屋形へふみこんでお  
 ん首ばかりを戴いたのでござります。

いけどりと云えば、あさい石見守<sup>いわみのかみ</sup>、赤尾みまさかのかみ、おな

じく新兵衛、この三人のかた／＼は武運つたなく縄目のはじを  
 おうけになつて御前へひきすえられました。そのときのぶなが公

が、「そのほう共、しゅじん長政にぎやくしんをおこさせ、としごろひごろようも己をくるしめたな」とおつしやりましたので、石見どのは強情な仁じんでござりますから、「わたくし主人あさいながまさは織田どのゝような表裏ある大将ではござりませぬ」と申しあげますと、のぶなが公かつと御りつぷくあそばされ、「おのれ、ふかくにも生けどりになるほどの侍として、ものゝひようりが分るか」と、鑕やりのいしづきで石見どのゝあたまを三度おつきになりました。なれどもひるむけしきもなく、「手足をしばられているものをちようちやくなされてお腹がいえますか、おん大将のこゝろがけはちがったものでござりますな」とにくまれぐちをたゝかれましたので、ついにお手うちになりました。美作どのはおと

なくしておられましたところが、「その方じやくねんのみぎりより武勇のほまれたかく、おにがみのようにうたわれながらなんとしておくれを取つたるぞ」との仰せに、「とかく老もういたしまして此の通りのしまつでござります」と申され、「いちめいを許して取りたてゝつかわそう」という御ごじよう諛でござりましたけれども、「このうえはなんの望みもござりませぬ」と申されてひたすらおいとまをねがわれました。「しからばせがれの新兵衛を世話してやろう」とかさねて御じようがござりましたときに、美作どの御子息しんべえどのをかえりみられ、「いやゝゝ、御辞退申した方がよいぞ、殿にだまされてわるびれてはならぬぞ」と申されましたので、からゝとおわらいなされ、「老いぼれめ、己を

うたがっているな、そんなに己がうそつきに見えるか」と仰つしやつて、そのうちほんとうに新兵衛どのをお取りたてになりました。

小谷のおくがたは夫おつとながまさ公御しようがいとおき、あそばしてから、一とまにとじこもられたきりにちく／＼御回向をあそばしていらつしやいますと、或る日のぶなが公がお見まいにおいでなされ、「たしかそなたには男の子が一人あつたはずだ、その子がたつしやならわたしが引きとつてよう養育いくをして長政のあとをつがせてやりたいが」と仰つしやるのでござりました。おくがたは最初、兄ぎみのこゝろをはかりかねて、「若わかはどうなりましたことやら存じませぬ」と申されましたが、「ながまさこそかたきだけ

れども子どもになんの罪があるう、わたしには甥おいになるのだから  
いとおしゆうてたずねるのだ」と仰つしやりますので、さてはそ  
れほどにおもつて下さるのかとだん／＼御あんどあそばされ、  
これ／＼のところにおりますと、万福丸どの、かくれがをおもら  
しになりました。それでえちぜんきないのすけの国つるがごおりへお使者が立  
ちまして、木村喜内介へ、わかぎみをつれてまいるように仰せ  
つかわされましたけれども、きないのすけは思案をいたし、わか  
ぎみは自分いちぞんを以て斬つてすてましたとおこたえ申しまし  
たところが、その後もさい／＼おつかいがござりまして、兄うえ  
があゝまで云われるものをなまじかくしては折角のなさけにそむ  
く、わがみも和子わこのぶじな顔をみたいほどに一日もはやくつれて

きておくれと、しきりにおくがたがせつかれるものでござりますから、きないのすけもこゝろえがたくおもいながら、とてもありかを知られたうえはと、万福丸どのゝお供をして、九がつ三日にごうしゆう木之本へまいりました。すると木下藤きちろうどのがむかえに出られて若君をうけとられ、のぶなが公へそのむねを言上いたされますと、「その方その子を討ちはたし、くびを串ざしにしてさらしものにしろ」と仰っしゃりますので、さすが藤吉郎どのもとうわくいたされ、「それまでのことは」と云われましたなれども、かえつてお叱りを蒙りまして、よんどころなく御錠のとおりになされました。ながまさ公のお首も、あさくら義景どの、お首といっしよに、肉をさらし取つて朱塗りにあそばされ、よく

ねんの正月、それを折敷おしきにすえてさんがの大名しゆうへおさかなに出されました。のぶなが公も浅井どのゝためにはたびゝあやうい目におあいなされ、よほどおにくしみが深かったのでござりましようけれども、もとはと云えば御じぶんの方がせいしを反古になされたのでござります。せめて妹御のおんなげきをさつしておあげなされたら、えんじやのよしみもあるおかたをあれほどになさらないでもようござりましたろうに。とりわけにくしんのなさけをかりてお市どのをあざむかれ、がんぜないお子をくしぎしになさるとは、あまりむごたらしいなされかたでござります。されば天正じゆうねんの夏、ほんのう寺においてひごうにおはてなされましたのも、あけちがぎやくしんばかりではなく、おおくの

ひとのつもるうらみでござりましょう。いんがのほどはおそろし  
ゆうござります。

のちの太閤殿下、きのした藤吉郎どのがりつしんなされましたの  
も此のころからでござりました。こんどの城ぜめには柴田どのは  
じめみなく手柄をきそわれましたなれども、なかについて藤吉  
郎どのはばつぐんの功をおたてなされ、のぶなが公もなゝめなら  
ずおよろこびになりました、小谷のおしろと、あさい郡ごおりと、坂田  
ごおりのはんぶんと、いぬがみ郡とを所領にくだされ、江北のし  
ゆごとなされました。そのおり藤吉郎どのは、小谷のおしろは小  
ぜいにてはまもりがたいと仰せられ、わたくしのききよう長浜へ  
うつられました、当時あそこは今浜と申しておりますのを、こ

のとき長浜とおあらためになつたのでござります。

それはとにかく、ひでよし公が小谷のおくがたに懸想けそなされまし

たのはいつごろからでござりましたか。わたくしはおくがたがお城をおたちのきななされましたとき、「いっしょにつれて行つてやりたいが、いったんこゝをおちのびてからたよつておいで」と、有りがたい仰せがござりましたものですから、この身はすでになきものとかくごいたしておりましたのがまよいのこゝろをしようじまして、おのりものゝあとからまぎれ出で、かつせんのしゞゆうを見とゞける迄いちにちふつかは町かたにかくれておりましたけれども、またおそばをしとうて上野守どのゝ御陣へあがりましたところ、氣にいりの座頭であるからとおこえがゝりがござりま

したので、さいわいにきびしいおとがめもござりませんで、ふたゝび御用をつとめておったのでござります。されば秀吉公がおこしなされましたおりにもたびゝお次にひかえておったのでござります。はじめに御たいめんのときは、御前へ出られますとはるかにへいふくされまして、「わたくしが藤吉郎にござります」とうやくゝしい御あいさつでござりましたので、おくがたもつゝましやかに御えしやくを返され、せんじんの骨折をおねぎらいなされました。ひでよし公は、「わたくし、このたびさせる軍功もござりませぬのに御褒美としてあさいどのゝ所領をたまわり、もつたいなくも長政公のおんあとをつぎますことは弓矢とつてのめんぼくでござります、たゞこのうえは何事も古きおしおきにしたが

つて江北をとりしずめ、亡きおん大将の武ゆうにあやかりとうぞ  
んじます」と申され、「陣中のことゆえさぞ御不じゆうでござり  
ましよう、なんぞお手まわりのしなにても御不足のものはござり  
ませぬか、おこゝろおきのうお申しつけくださりませ」などゝ、  
それはく如<sup>じよさい</sup>在のな<sup>い</sup>おことばで、おどろくばかりあいそのよ  
いお方でござりました。ことにひめぎみたちにまで何くれと御あ  
いきようを振りまかれ、御きげんをとられまして、「お姫<sup>ひい</sup>さまが  
いちばんの姉<sup>あね</sup>さままでいらつしやいますか、どれく、わたくしに  
抱<sup>だ</sup>つこなさりませ」と、お茶々どのをひぎの上へおのせなされお  
ぐしをかいておあげなされて、「おとしはいくつ、おなまえは」  
などゝおたずねになるのでござりました。お茶々どのははか／＼

／＼しい御へんじもなさらずにしぶく抱かれていらつしやいました。が、このひとが父御ていごのしろをせめおとした一方の旗がしらかと、おさなごゝろにもくゝおぼしめしましたものか、ふと秀吉公のかおをおさしなされ、「そなたは猿に似ているのかえ」とおつしやりましたものですから、ひでよし公もすこし持てあまされまして、「さようでござります、わたくしは猿に似ておりますが、お姫さまはお袋さまにそっくりでいらつしやいますな」と申され、はっ、はっ、はつと、わらいにまぎらされました。その後もおいそがしいなかをぬけめなくおみまいにおいでなされ、何やかやとひめぎみたちにまで御しんもつをなされまして、ひとかたならぬおこゝろぞえでござりましたから、おくがたも、「藤きちろうは

たのもしいものじゃ」と仰つしやつて、気をゆるしていらつしや  
いましたけれども、わたくし、いまからかんがえますのに、お市  
どの、世にたぐいない御きりようにはやくも眼をおつけなされ、  
ひとしれず思いをよせていらしたのではござりますまいか。も  
つとも主人のぶなが公のいもうと御ごであらせられ、けらいの身で  
はおよびもつかぬ高嶺たかねの花でござりましたからまさかそのとき  
どうというおつもりもござりますまいが、なにぶん此のみちにか  
けましたらゆだんのならぬ秀吉公でござります。みぶんのちがい  
と申しましても、ういてんぺんは世のつねのこと、とり分けえい  
こせいすいのはげしいのは戦国のならわしでござります。されば  
ながい月日のうちにいつかは此のおくがたをと、ひそかにのぞみ

をおかけなされましたやら、なされませなんだやら、えいゆうごうけつこのころのうちは凡夫にはかりかねますけれども、あなたがこれはわたくしの邪推ばかりでもないような気がいたします。

そう云えば万福丸どのを討ちはたすように仰せがございましたとき、ひでよし公のとうわくなされかたは尋常でなかつたと申します。あればかりのわかぎみ一人おゆるされになりましたとて何ほどの事がござりましょうや、それより浅井どの、みようせきをおつがせなされ、おんをおきせになりました方がかえつて天下せいひつのもとい、仁あり義あるなされかたとぞんじますと、さまざま／＼におとりなしあそばされましたが、おきゝ入れがござりませなんだので、「しからばなにとぞ此のやくを余人におおせつけ

くださりますよう」と、いつになくさからわれましたところ、のぶなが公はなはだしく御きげんを損ぜられ、「その方こんどの功にほこつてまんしんいたしたか、いらざるかんげんだてをなし、あまつさえわがいつけをしりぞけて余人にたのめとは何ごとだ」と、きびしくおとがめなされましたものですから、しおくと退出されまして、けつきよく若君を御せいばいなされたのだときいております。かれこれおもいあわせますのに、ひでよし公はまんぷくまるどのを害されて、のちくまでもおくがたのうらみをお受けなさることがおつらかったのでござりましょう。それもなみくくのころしかたでなく、くしぎしにしてさらしものにせよとの御じようとありましては、なおさらのことでござります。この役

まわりがえりにえつて秀吉公にわりあてられましたのは、笑止しやうし  
と申しましようか、おきのどくと申しましようか。こうねん柴田  
どのとこのおくがたの取りあいをなされ、こいにはおやぶれにな  
りましたけれども、ついに勝家公御夫婦をせめほろぼされ、生々  
よゝのかたきとなられましたのもこのときからのいんねんでがな  
ござりましよう。

当時わかぎみの御さいごのことはおくがたのお耳へいれぬよう  
と、のぶなが公のおこゝろづかいがござりましたので、たれいち  
にんも申しあげたものはないはずでござりますけれども、さらし  
くびにまでなりました、しよにんのまなこにふれましたことゆえ、  
うすく世せしやう上のとりさたをおきゝこみになりましたか、または

むしがしらせたと申しますものか、いつからともなくけはいをお  
さとりあそばしてきつと御しあんなされたらしゆう、それから  
秀吉公がおこしになりますとかえつてみけしきがすぐれぬよう  
ござりました。なれども或る日、「えちぜんからはあれきりなん  
のたよりもないが、若<sup>わか</sup>はどうしたことかしらん、とかく夢みがわ  
るので気になります」と、ひでよし公へおたずねになりました  
ので、「さあ、いっこうに承知いたしませぬが、いまいちどおつ  
かいをお出しなされましては」と、さあらぬていで申されますと、  
「でも、そなたが若をうけとりに行つたというではないか」と仰  
つしやりましたのが、しづかなうちにもするどいおこえでござり  
ました。こしもと衆のはなしでは、そのときばかりはお顔のいろ

までがまつさおにかわつて、ひでよし公をはつたとおねめつけなされたそうにござります。そんなことから秀よし公は御前のしゅびがわるくなりまして、だん／＼遠のかれましたのでござります。さて信長公はわずかのあいだに数箇国をきりなびけられ、こと／＼くわがりようぶんにくわえられまして、しようしへの御ほうび、こうにんのおしおきなど、それ／＼御さたあそばされ、九がつ九日にはもはや岐阜のおしろにおいて菊の節句をおいわいあそばされました。ちようよう重陽のえんはまいねんのごとでござりますけれども、べつしてそのみぎりは大小名がよそおいをこらしてお礼にまいられ、ごんごどうだんのぎしきのありさま、めをおどろかすばかりであつたともつぱらのうわさでござりました。おくが

たはしよろうと申しふれられてしばらく江北におとゞまりなされ  
まして、どなたにもたいめんあそばされず引きこもっておられま  
したが、おなじ月のおかごろ、いよく尾州清洲のおさとかびしゆうきよす  
たへおかえりあそばすことになりました。当時信長公はぎふの稲  
葉やまを本城になすつていらつしやいましたので、おくがたには  
閑静なきよすのおしろのほうが御つごうがよかつたのでござりま  
す。もつとも途中ちくぶしまへさんけいなさりたいと云う仰せで  
ござりましたから、お女中がたやわたくしども、おつきせい申し  
あげまして、長浜よりお船にめされました。おりふし、伊吹やまいぶき  
にはもう雪がつもっておりまして、みずうみのうえはひとしおさ  
むうござりましたけれども、さえわたった朝のことでござりまし

たので、とおくちかくの山々まではつきり見えたのでござりましたよう、お女中がたはみなくふなばたにとりついて、ながねすみなれた土地にわかれを惜しまれ、そらをわたるかりがねのこえ、かもめの羽ばたきにもなみだをながされ、かぜにそよぐあしの葉のおと、なみまにおどる魚のかげにもあわれをもよおされましたことでもござります。ふねが竹生ちくぶしまの沖あいへまいりましたとき、「しばらくこゝでとめておくれ」というおことばでもござりまして、いちどう何事かと不しんにぞんじておりますと、やがて舳へさきに経つづくえをおなおしなされ、水のおもてにむかつてたなごゝろを合わされしずかに御ねんじゅあそばされましたのは、おおかたそのあたりのみなぞこにかの石塔がしずめてあったのでござりましょう。

さてはちくぶしまへまいりたいと御意ぎよなされたのもそういう仔細  
がおありになったのかと、そのときわれ／＼もおもいあたりまし  
たのでござります。ふねが波のまに／＼ゆられて一つとところにたゞ  
ようておりますあいだ、おくがたは香をおたきあそばして南無徳  
しよう《勝》寺殿天英宗清大居士と、いつしんにおんまなこを閉  
じられ、あまりながいこと合掌なされていらつしやいますので、  
もしやこのまゝ、ふなばたよりおん身をひるがえし、おなじみな  
ぞこのもくずにおなりあそばすのではないかと、おそばのかた／  
＼はしんぱいしまして、そつとおめしものゝすそをとらえてい  
たそうでござりますが、わたくしにはたゞ、おくがたのお手のう  
ちで鳴るじゆずのおとがきこえ、たえなる香のかおりがにおつて

まいったばかりでござります。

それよりしまへおあがりなされて一と夜さんろう参籠あそばされ、あく

る日さわ佐和やまへおわたりになりました、いちにちふつか御きゆう

そくなされましてから御ほつそくあそばし、どうちゆうつゝがな

く清洲きよすのおしろへ御あんちやくになりました。おさとかたではけ

つこうな御殿をしつらえてお迎え申し、「小谷のおん方」とおよ

び申しあげて至極たいせつなおとりあつかいでござりましたから、

なに御不自由のないおみのうえでござりましたけれども、姫ぎみ

たちの御せいじんをたのしみにあさゆうかんきん看経をあそばすほかに

はこれと申すお仕事もなく、おとなうお方もござりませんので、

もうまったくの世すてびとのような佗びしいおくらしでござりま

した。それにつけても、いまゝではおおぜいの人目もござりますし、なにやかやとおまぎれになることもござりましたのに、ひねもすうすぐらいお部屋のおくにとじこもっていらしてしよざいなくおくらしなされましては、みじかい冬の日あしでさえもなか／＼長うござります。しぜんおむねのなかには亡き殿さまのおすがたがおもいうかべられ、あゝいうこともあつた、こういうこともあつたと、かえらぬむかしをおしのびなされて悲歎にくれていらつしやいました。いったいおくがたは武門のおうまれでいらつしやいますから、なにごとにも御辛抱づようござりまして、めつたと人にふかくのなみだをおみせになることはござりませなんだが、もはやその頃はおそばの衆と申しましてもわたくしどもばかり

りでござりましたので、はりつめたおこゝろもいつときにおゆるみなされたのでござりましょう。いまこそほんとうのかなしみに  
おん身をゆだねられ、ひとけのない奥の間で何をおもい出されま  
してかしのびねに泣いていらつしやるのが、ふとお廊下を通りま  
すときに耳についたりいたしまして、とかくお袖のしめりがちな  
日がおおいようでござりました。

そういう風にして一とせ二たとせはゆめのようにすぎましたな  
れども、そのあいだ、春は花見、あきはもみじがりのお催しなど、  
お気ばらしにおすゝめいたしましても、「わたしはやめます、お  
まえたちで行つておいで」と仰つしやいまして、御じぶんは浮世  
のほかのくらしをなされ、たゞひめぎみたちをお相手になされま

すのがせめてものお心やりと見えまして、御きげんのよいおわらいごえのきかれますのはそんなときばかりでござりました。さいわい三人のお子たちはどなたもおたっしやにおそだちなされ、おんみのたけも日ましにおのびになりました、いちばんおちいさい小督こごうどのなども最早やおひとりであんよをなされたり、かたことまぜりにものを仰つしやつたりなされましたので、それをごらんあそばすにつけても亡おつとき夫が御ぞんしようであられたならばと、またおんなげきのたねでござりました。べつしておふくろさまとしましては、まんぷく丸どの、御さいごのことをお忘れなく、いつまでもおいたみなされていらつしやいました、なにぶん御自分のあさはかさから現在ののお子を敵におわたしなされまして、あゝ

いうおかあいそうなことになったのでござりますから、だました人もうらめしく、だまされたわが身もくちおしく、なか／＼おあきらめになれなかつたらしゅうござります。それに福田寺へおあずけなされた末の若君もいまはどうしていらつしやるやら。よいあんばいに信長公は此のお子のことを御存知なされませんでしたので、いったんはおのがれになりましたものゝ、乳ちのみ児のおりにおわかれなされましたきりその後の安否をおき／＼にならないのでござりますから、口に出しては仰つしやりませんが、雨につけ風につけ、いちにちとしておあんじあそばさないときはなかつたでござりましょう。そんなことから一そうひめぎみたちを世にないものにおぼしめしまして、ふたりの若君の分までもかあい

つてお上げなされました。

京極さいしろう《宰相》殿高次公は、ちようどそのじぶん十三四さいでいらつしやいましたでしょうか。のちには信長公の小姓をつとめられましたけれども、お元服まえはきよすにあずけられていらつしやいまして、とき／＼おくがたの御殿へおこしなされたことがござりました。申すまでもござりませぬが、もと此のお児は浅井どの、お家にとつては御主筋おしゆうすじにあたられる江北のおん屋形、佐々木高秀公のおわすれがたみでござります。さればがんらいはこのお児こそ近江はんごくのおんあるじでござりますけれども、御先祖高清入道のとき伊ぶきやまのふもとに御いんたいなされましてから、御りようないは浅井どの、御威勢になびいてし

まいまして、御じぶんたちはほそ／＼とくらしていらつしやい  
ましたところ、せんねん小谷らくじょうのみぎり、のぶなが公が  
江北に恩をきせよとの御けいりやくからわぎく此のお児をお  
よび出しになりました、小姓におとりたてなされたのでござりま  
す。こうねん、天正十年のろくがつこれとう惟任ひゆうがのかみのはん  
ぎやくにくみして安土万五郎あづちのともがらと長浜のしろをおせめな  
され、まった慶ちよう五年の九月関ヶ原かつせんのおりには、大  
坂がたに裏ぎりをなされて大津にろうじようあそぼされ、わずか  
三千人をもつて一まん五千の寄せ手をひきうけられましたのは此  
のお方でござりますが、まだそのころは、そういう横紙やぶりの  
御きしようともみえませなんだ。おとしから云えばわんぱくぎか

りの時分でござりましたけれども、貴人のおうまれでありながら  
幼いときよりひかげ日陰者もの、ようにおそだちなされ、どこかにこゝ  
ろぼそそうなあわれな御様子がおありになって、御前へ出られて  
もおくちかずがすくなく神妙にしていらつしやいましたので、わ  
たくしなどには、いらつしやるのかいらつしやらないのか分らな  
いくらいでござりました。もつとも此のお児のおふくろさまは長  
政公のいもうと御ごでござりましたから、ひめぎみたちとはいとこ  
同士、おくがたは義理の伯母御におなりなされます。それで万ぶ  
く丸どのゝことをしのばれるにつけても此のお児をいとしがられ  
まして、「わたしが母御のかわりになって上げますよ、用のない  
ときはいつでもこゝへあそびにおいで」と仰つしやつて、なさけ

をかけてお上げなされ、「あの児はだまつているけれども腹にしつかりしたところがある、きつと利発ものにちがいない」とおほめになつていらつしやいました。さようでござります、おはつ御ご料人りょうにんと御えんぐみをなされましたのは、それよりずっとのち、

七八ねんもさきのこととでござりまして、当時は姫ぎみもおちいそうござりましたから、そんなおはなしはござりませなんだ。なれども此のお児は、おはつどのよりもお茶々どのに人知れずのぞみをかけておいでなされ、それとなくお顔をぬすみ見にいらしたのではござりますまいか。もちろんどなたもそう気がついたかはござりませなんだが、子供のくせに大人のようにおちついていらして、むつつりとおだまりなされ、いつまでゞも御前にかし

こまっとおいでなされたのは、何かいわくがとおりになつたのかとおもわれます。そうでなければ、かくべつおもしろいこともないのにはばく御殿へおこしなされて、窮屈なおもいをあそばしながらじつとすわっていらつしやる訳もござりますまい。わたくしだけはなんとなく無気味なようにかんじまして、うすく嗅ぎつけておりましたので、「あのお児はお茶々さまに眼をつけているらしい」と、こしもとしゆうに耳うちをしたことがござりましたけれども、めくらのひがみだと申されましたみなさまがおわらいなされ、まじめにきいて下すつたかたはござりませなんだ。

さあ、おくがたが清洲にいらつしやいましたあいだは、小谷のおしろのおちましたのが天しようがんねんの秋のこと、それよりの

ぶなが公御逝去のとしの秋ごろまでゞござりますから、あしかけ十年、ざつとまる九ねんの月日になります。まことに光陰は矢のごとしとやら、すぎ去つてみればなるほどそうでござりますけれども、天下のみだれをよそにおながめあそばされ、いつどこに合戦があつたとも御存知ないようなひつそりとしたくらしをなされましては、九年というものはずいぶんなごうござります。さればおくがたもいつとはなしに次第にかなしみをおわすれなされ、つれ／＼のおりにはまた琴などのおなぐさみをあそばすようになりしました。それにつれましてわたくしも、すきなみちではござりまずし、お気散じきさんにもなりますことゆえ、御ほうこうのあいまにはしょうか唱歌やしやみせんのけいこをはげみ、わぎをみがきまして、

いよく御意にかないますように出しゅっせい精せいいたしましたことのでござります。唱歌と申せば、あの隆りゅうたつぶし達節たつぶしという小唄のはやり出しはたしかそのころでござりまして、

さてもそなたは

しもかあられか初ゆきか

しめてぬる夜の

きえ／＼となる

などゝ申すのや、それからまた、

りんきごゝろに

枕な投げそ

なげそまくらに

とがはよもあらじ

と申すうた、もつとおかしな文句のものでは、

帯をやりたれば

しならしの帯とて

非難をしやる

帯がしならしなら

そなたの肌もしならし

など、よくみなさまにうたつてきかせたことがござります。ちかごろは此のりゆうたつぶしもすたれましたけれども、一時はあれが今の弄齋節ろうさいぶしのように大はやりをいたしまして、きせん上下のへだてなくうたわれたものでござります。太閤でんかゞ伏見の

おしろでお能を御らんなされましたときは、隆達どのをおめしになつて舞台でうたわせられました、幽齋公がそれにあわせて小つゞみをお打ちになりました。わたくしがきよすにおります時分は、よう／＼流行しはじめたころでござりましたから、最初はほんの腰元しゅうの憂さはらしに、扇で拍子をとりながら小ごえでそつとうたいまして、節をおしえて上げたりしたのでござりますが、お女中がたは今申し上げたおかしな文句のうたがおすきで、あれをうたわせてはころ／＼とおわらいになるものですから、いつしかおくがたのお耳にとまりました、「わたしにもうたつてきかせておくれ」と仰つしやるのでござりました。「なか／＼、あなたがたにおきかせ申しますようなものでは」と、御じたい申し上げ

ましても、「ぜひにうたえ」と御意ぎよいなされますので、それから  
たび／＼御前へ出ましてうたったことがござります。「おもしろ  
の春雨や、花のちらぬほどふれ」と申す、あの文句をたいそうお  
このみなされ、あれをいつでも御所望あそばされまして、いつた  
いにうき／＼としたものよりは、しんみりとした、あわれみのふ  
かいものゝ方がおすきのようでござりました。よくわたくしがお  
きかせ申しましたのは、

しぐれも雪も

をり／＼にふる

君故なみだは

いつもこぼるゝ

とか、

おもふとも

そのいろ人に

しらすなよ

おもはぬふりで

わするなよ

というような唄でござります。この二つのうたの文句は何かしらわたくしの胸のおもいにかよいますせいか、これをいつしんにうたいますときは、腹のそこより不思議なちからがあふれいで、おのずから節まわしもこまやかになりこえさえ一そうのつやを発しましたので、おきゝになるかたもつねにかんどうあそばされ、又

自分でも自分のうたのたくみさにきゝほれまして、こゝろの中の  
わだかまりがいつとくに晴れるのでござりました。それにわたく  
しはしやみせんの曲をかんがえまして、文句のあいだにおもしろ  
い合いの手などをくわえて、いちだんと情じょうのふかいものにいたし  
ました。こんなことを申しますと何やら自慢めきますけれども、  
こういう小唄に三味せんを合わせますのは、わたくしなどのいた  
ずらが始めなのでござりまして、まえにも申しましたように、当  
時は鼓で拍子をとりますのが普通だったのでござります。

とかくはなしが遊芸のことにわたりますようでもござりますが、わ  
たくしいつもかんがえますのに、うまれつきおんせいがうつくし  
く、唄をきようにうたうことが出来ますものは此のうえもなく仕

合わせかとぞんじます。隆達どのも元は堺さかいのくすりあきうどでござりましたのに、うたが上手なればこそ太こう殿下のお召しにもあずかり、ゆうさい公につゞみを打たせていちだいの面目をほどこされました。もつともあのかたはみずから一流をはつめいなされましたほどの名人、それにくらべたらわたくしなどはものゝかずでもござりませぬが、清洲のおしろで十じゅうねん年の春はる秋あきをすごしまするあいだ、あけてくれおくがたのおそばをはなれず、月ゆき花のおりにふれて風流のお相手をつとめまして、ひとかたならぬ御恩をこうむりましたのも、いさゝかおんぎよくをたしなみましたがゆえでござります。人の望みはいろくでござりまして、何がいちばんの果報とも申されませぬから、わたくしのようなきよ

うがいをあわれとおぼしめすかたもござりましようなれども、じぶんの身にとり此の十ねんのあいだほどたのしいときはござりませなんだ。さればなか／＼隆達どのをうらやましいともおもいませぬ。それを何ゆえかと申しますのに、おくがたのおことにあわせて三味線のひじゅつをつくし、または御しよもうの唄をおきゝに入れて御しんちゆうのうれいをやわらげ、いつも／＼おほめのおことばをいたゞいていたのでござりますから、たいこうでんかのぎよかんにあずかりましたよりもずっとほんもうでござります。これもめしいにうまれましたおかげかとおもえば、このとしになりますまで自分のかたわをくやんだことは一ぺんもござりませぬ。世のことわざに、蟻のおもいも天までとゞくと申します。はかな

いめくらほうし盲法師でもちゆうぎは人とかわりませぬから、すこしでも御  
しんろうが癒いえますように、せい／＼御きげんうるわしゆうお  
くらしなされますようにと、こゝろをこめておつかえ申し、しん  
ぶつにきがんをかけましたせいか、いや、あながちに、そのせい  
ばかりでもござりますまいが、そのころおくがたはおい／＼にお  
肥こえあそばされ、いちじはずいぶんやつれていらつしやいました  
のに、又いつのまにかむかしのようにみず／＼しゆうおなりなさ  
れました。おさとへおかえりになりました当座は、お肩のほねと  
いちばんうえのあばらとのあいだに凹みが出来、それがだん／＼  
ふかくなりまして、おくびのまわりなどひとしきりの半分ほどに  
おなりなされ、やせほそられるばかりでござりましたので、りよ

うじを仰せつかりますたびになみだにくれておりましたところ、三年目、四ねんめあたりから、うれしや日に月にわずかずつ肉がおつきなされ、七八ねん目には小谷のころよりもなまめかしゅうつやくとおなりなされて、これが五人のお子たちをお産みあそばしたおかたとはおもえぬほどでござりました。こしもとしゅうにきゝまして、丸顔のおかおがひところほそおもてになられましたのに、このころはまた頬のあたりがふつくらとしもぶくれにおなりあそばし、それにおくれ毛のひとすじふたすじかゝりました風情はたとえようもなくあだめいて、おんなでさえもほれ／＼したと申します。お肌のいろがまつしろでいらつしやいましたのはもとより天品でござりますすけれども、ながのとしつき日の眼

のとゞかぬおくのまに寝雪ねゆきのようにとじこもっておくらしなされ、  
すきとおるばかりにおなりあそばして、たそがれどきにくらいと  
ころでものおもいにしずんでいらつしやるお顔のいろの白さなど、  
ぞうつと総毛そうけだつようにおぼえたそうでござります。もつとも物  
のあやめは、かんのよいめくらにはおおよそ手ざわりで分るもの  
でござりまして、わたくしなども、どんなにいろじろでいらつし  
やいますかはひとのうわさをきくまでもなくしようちいたしてお  
りましたが、おなじ白いと申しましても御身分のあるおかたのし  
ろさは又かくべつでござります。ましておくがたは三十路みそじにちか  
くおなりあそばし、お年をめすにしたがつていよゝゝ御きりよう  
がみずぎわ立たれ、ようがんですくゝおんうるわしく、つゆもし

たゝるばかりのくろかみ、芙蓉のはなのおんよそおい、そのうえ  
ふくよかにお肥えなされたおからだのなよ／＼としてえん艶なるこ  
とゝ申したら、やわらかなきぬのおめしものがする／＼すべりお  
ちるようでござりまして、きめのこまかさなめらかさはお若いと  
きよりまたひとしおでござりました。それにしてもこれほどのお  
かたが早くから不縁におなりなされ、つゝむにあまる色香をかく  
してあじきないひとりねのゆめをかさねていらつしやるとは、な  
んということか。しんざん《深山》の花は野のはなよりもかおり  
がたかいと申しますが、春はお庭にきて啼くうぐいす、あきは山  
の端はにかたぶく月のひかりよりほかにうかゞうものゝない玉簾たまだれ  
のおくのおすがたを、もし知るひとがありましたら、ひでよし公

ならずとも煩惱のほのおをもやしたことでござりませうに、とかくよのなかの廻りあわせはこうしたものでござります。

そんなぐあい、そのころのおくがたは、花さく春のふたゝびめぐりくるときをお待ちあそばす御様子も見えましたが、やはりむかしのおつらかったこと、くやしかったことを、きれいにお忘れにはならなかつたらしゅうござります。それと申しますのは、わたくし、あんなことはあとにもさきにもたつた一遍でござりますけれども、ある日御りようじをつとめながらお話のお相手をしておりましたとき、何かのはずみで、おもいがけないおことばを伺ったことがあるのでござります。その日は最初れいになく御きげんのていござりまして、小谷のころのこと、長政公のおんこと、

そのほかいろ／＼古いことをおもい出されておきかせ下さいましたついでに、ひと／＼せ佐和やまのおしろにおいてのぶなが公とながまさ公と初めて御たいめんなされたおりのおものがたりがござりました。なんでもそれはおくがたが御えんぐみなされましてから間もなくのこと、おおかた永らく年中でござりましたろう、當時さわやまは浅井どの／＼御りようぶんでござりましたから、のぶなが公はみの／＼によりおこしなされ、ながまさ公はすりはり峠までお出むかえあそばされ、やがておしろへ御あんないなされまして、しよたいめんの御あいさつの／＼ち、善をつくし美をつくしたるおもてなしがござりました。さてあくる日は、たゞいま天下の大事をひかえてあなたこなたと日をついやすもいかゞであるか

ら、今度はそれがしがこのしろをお借り申し、自分が主人役とな  
 った御へんれいをいたそうと、のぶなが公より仰せいだされ、な  
 がまさ公と御いんきよとおなじしろにおいておふるまいにおよ  
 ばれまして、おだどのよりの引出物ひきでものには、一文字宗吉のおん太  
 刀をはじめおびたゞしきんすぎんすうまい金子銀子馬代を御けらいしゆうへまで  
 くだしおかれ、あさいどのよりの御かえしには、おいえ重代じゆうだい  
 の備前かねみつ、定家卿の藤川にてあそばされました近江名所づ  
 くしの歌書、そのほかつきげの駒、おうみ綿などけつこうなしな  
 〃〃〃をとゝのえられ、お供のかた〃〃〃にも御めい〃〃へあら  
 みの太刀やわきざしをおくられました。またおくがたも久々にて  
 おん兄ぎみに御たいめんのため小谷よりおこしなされましたので、

のぶなが公のおんよろこびひとかたならず、あさいどの、老臣がたを御前へおめしになりました、みなくきかれよ、その方どもの主人びぜんのかみが斯くそれがしの聳になるうえは、にほんこくちゆうは両家の旗になびくであろう、さればそのつもりでずいぶん粉骨ふんこつをぬきんでくれたら、きつとおのくを大名にとりたて、つかわすぞと仰せられ、ひねもす御しゆえんがござりまして、夜は御よるきようだい三人にてむつまじくおくのまへおん入りあそばし、ひきつゞいて十日あまりも御たいりゆうなされました。そのあいだの御ちそうには、さわ山の浦に大あみをおろしまして、鯉やら、ふなやら、湖水のうおを数しれずとつてさしあげましたところ、これもこと／＼く御意にかない、美濃のくにではとて

も見られぬ名物である故、ぜひかえりにはみやげに持ってゆきた  
いととおおせられ、いよ／＼御帰じようのまえの日にふたゝびおん  
なごりの御しゆえんなどがござりまして、じょうく上々くのしゆびにて  
御ほつそくなされましたとのこと。「あのときは内大臣どのも徳と  
くしょうじでん勝寺殿さまもほんとうに仲がよさそうににこ／＼していらし  
つて、わたしもどんなにうれしかったことか」などゝ、そんなお  
はなしをこま／＼とあそばされまして、「おもえばあの十日ば  
かりのあいだがわたしのいちばんしあわせなときでした。それに  
つけても一生のうちなたのしいおりというものはそうたくさんは  
ないものだね」と仰つしやるのでござりました。さればそのとき  
はおくがたは申すまでもなく、御けらいたちも両家が不和になろ

うなどゝは考えてもみませぬことで、みなくせんしゅうばんぜいを祝われたのでござりますが、ながまさ公が兼光のおん太刀を引出物になされましたについて、のちに兎や角申すものがありましたそうにござります。それはなぜかと申しますのに、右のおん太刀は御せんぞ亮政公御ひぞうのお打ち物でござりました由にて、いかにたいせつな御しゅうぎのばあいとはいえ、あゝいう重代のためから他家へつかかわされる法はないのに、そういうことをあそばしたのが、あさいのお家の織田どのにほろぼされる前ぜんびょう表だつたのだと申すのでござります。なれども理窟はつけようでござります。長政公がそれほどの品をおゆずりなされましたのも、つまりはおくがたや義理の兄上をなみくならずおぼしめしたから

でござりましょう。そのためにお家がほろびたのなんと、それは世間のなまものしりがたま／＼事のなりゆきを見てそういう風に云いたがるのではござりますまいか。わたくしがさように申し上げましたら、

「それはおまえのいう通りです」

と、おくがたもおうなずきあそばして、

「舅となり聳となりながら、ほろぼすのほろぼされるのと、そんなことを気にするほうがまちがっています。内大臣どのにしたところ、そのじぶん敵か味方かわからない土地をお通りなされて、わずかのにんずでみのゝくにからはる／＼おこしになるといふのは、容易のことではなかったのです。そのこゝろざしにたいし

ても、徳勝寺殿さまがあれだけのことをしてあげるのは、ひごろの御きしようとしてあたりまえだとおもいます」

と仰つしやつて、それからまた仰つしやいますのに、

「でもおおぜいのけらいのなか中には不こゝろえなものもいました。

たしか遠藤喜右衛門尉という者だったか、あのときわたしたちが小谷へかえると、あとから馬でおいかけて来て、こよい織田どのはかしわばらで御一宿なされます、よいついでゞござりますから討ち果たしておしまいなされませと、わたしには内證で、そつと殿さまにみゝうちをしたことがありました。おろかなことをいう奴だとのさまはお笑いなされて、おとりあげにはならなかつたけれど」

と、そんなおはなしがござりました。

そのみぎり、長政公はすりはり峠までお送りなされ、そこでお別れになりました。えんどう喜えものじよう、あさい縫殿助、なかじま九郎次郎の三人をもつて、柏原までのぶなが公のお供をおさせなされたよしにござります。おだどのはかしわばらへおつきになりますと、常<sup>じようぼだい</sup>菩提院のおんやどへお入りなされ、こゝはながまさの領分だからすこしも心配はないと仰つしやつて、御馬廻りのさむらいたちを町かたへおあずけになり、お近<sup>きんじゆう</sup>習の小姓しゆうと当番役のものだけをおそばへお置きなされました。えんどう殿はそのありさまを見てとつて急にひきかえし、馬にむち打ちもろあぶみにて小谷へはせつき、人をとおざけてながまさ公

へ申されますようは、それがしつく／＼信長公の御ようだいを  
うかゞいますのに、ものごとにお気をつけられることは猿えんこう猴こうの  
こずえをつたうがごとく、御はつめいなことは鏡にかけのうつる  
がごとく、すえおそろしいおん大将でござりますゆえとても此の  
ち殿さまとの折り合いがうまく行くはずはござりませぬ、こよい  
のぶなが公はいかにも打ちとけておいでなされ、お宿にはほんの  
十四五人がつめていただけでござりますから、しよせん今のまに  
お討ちとりなされるのが上じょう分ぶん別べつかとぞんじます、いそぎ御決  
心なされて御にんずをお出しあそばされ、おだどの主従をこと／  
＼く討ち取つて岐阜へらんにゆうなされましたなら、濃州尾州  
はさつそくお手にはいります、そのいきおいにて江南の佐々木を

おいはい、都に旗をおあげなされて三好をせいばつあそばされるものならば、てんがを御しはいなされますのはまた、くうちでござりましよう、しきりに説かれましたそうでござります。そのときにながまさ公の仰せに、およそ武将となる身にはこゝろえがある、はかりごとをもつて討つのはよいが、こちらを信じて来たものをだまし討ちにするのは道でない、のぶなが、今こゝろをゆるしてわが領内にとゞまっているのに、そのゆだんにつけ入って攻めほろぼしては、たとい一たんの利を得てもついには天のがめをこうむる、討とうとおもえば此のあいだじゆう佐和山においても討てたけれども、おれはそんな義理にはずれたことはきらいだと仰っしゃって、どうしてもおもちいになりましたので、

遠藤どのもそれならいたし方がござりませぬが、あとでかならず後悔あそばされるときがござりますぞと申されて、またかしわばらへおもどりなされ、なにげないで御馳走申しあげまして、あくる日無事にせきがはらまでお見おくりなされましたとやら。おくがたは此のいきさつをくわしくおきかせくださりまして、

「しかし遠藤の云つたことにも、いまかんがえれば尤もなふしがあるようにおもわれる」

と、そうおっしゃるのでござりましたが、そのときふいにおこえがふるえて、異様にきこえましたので、なにかわたくしもはつといたしてうろたえておりますと、

「一方がいくら義理をたてゝも、一方がたてゝくれなかつたらな

んにもならない。てんがを取るにはちくしようにもおとつたまねをしなければならぬのかしら」

と、ひとりごとのように仰つしやつて、それきりじつといきをこらえていらつしやるではござりませんか。わたくし、これはともいまして、お肩をもんでおりました手をやすめて、

「はゞかりながら、おさつし申しあげております」

と、おぼえずへいふくいたしました。するとおくがたはもう何事もなかつたように、

「御苦ろうでした」

と仰つしやつて、

「よいからあちらへ行つておくれ」

というおことばでござりますので、いそいでおつきへさがりましたけれども、そのときはやくはなをすゝつていらつしやるおとがふすまをへだてゝきこえたのでござります。それにしてもついさつきまでは御きげんがようござりましたのに、いつのまにかみけしきがおかわりなされ、いまのようなことを仰つしやつたのはどうしたわけか。はじめはたゞ、なつかしいむかしがたりをあそばしていらつしやるうちに、だん／＼お話に身がいらすぎて、おもい出さずともよいことまでおもい出されたのでござりましょうか。はしたない奉公人なぞに御心中をおもらしなされますようなおかたではござりませなんだのに、しゞゆうおむねのおくふかくこらえてばかりおすごしなされましたのが、御自分でもおもいもうけ

ぬときにはからずお口へ出たのかもしれませぬ。なれども小谷のころのことを十とせにちかい今となつてもおわすれなさらず、これほどつよく根にもつておいでなされ、とりわけおん兄のぶなが公へそれまでのおにくしみをかけていらつしやいましたとは。夫をうばわれ子をうばわれた母御のうらみはなるほどこういうものだったかと、わたくしそれをはじめて知りまして、もつたいなさとおそろしさとにそのあとしばらくからだのふるえが止まなかつたくらいでござります。

まだこのほかにもきよすにいらした時分のことはおもいでばなしがかずく／＼ござりますけれども、あまりくだく／＼しゅうござりますからこれほどにいたしておきまして、それよりのぶなが公の

ふりよの御さいごをきつかけに、このおくがたがふたゝび御えんぐみあそばすようになりました始終を申し上げましょう。もつとも信長公御せいきよのことはかくべつ申し上げませいでもあなたがたはよく御ぞんじでいらつしやいます。あの本のう寺の夜討ちのござりましたのが天正じゅう年みずのえうまどしのろくがつ二日。なにしろかようなへんじが変事出しゅったい来たいいたそうとはたれいちにんもゆめにもおもいつかなんだことでござります。そのうえおん子城介どのまでがおなじく二条の御所においてあけちが兵に取りこめられて御せつぷくあそばされ、御父子いちどに御他界と知れましたときはまったく世の中がわきかえるようなさわぎでござりました。おりふし御次男きたばたけ中将どのは勢州に御座あそば

され、御三男三七どのは丹羽五ろぎえもんどのと御いつしよに泉州堺の津においでなされ、しばた羽柴のかた／＼もそれ／＼とおくへ御出陣でござりまして、あづちのおしろにはお留守居役がもうの蒲生右兵衛大夫どのが手うすのにんずで御台みだいやお女中さまがたをしゅごしておいでなされました。それで侍をはだか馬にのせて御城下へふれあるかせ、「さわぐなく」と取りしずめて廻られましたも、まちかたの者はいまにもあけちが攻めて来ると申して泣くやらわめくやらのうろたえ方でござります。右兵衛だいいふどのも最初は安土にろうじょうのかくごでおられましたけれども、こゝではこゝろもとないとおもわれましたか、また急に模様がえになりまして、御台やお局さまがたを早々におつれ申し上げて御

自分の居城日野谷へたちのかれました。それが三日の卯うの刻だそ  
うで、五日には早や日向守があづちへまいりなんなくおしろを乗  
つとりまして、けっこうなお道具類やきんぎんのたからがそのま  
になっておりましたのをごと／＼く己れのものになし、家来た  
ちにもわけあたえたと申すうわさでござりました。あづちがそん  
なふうでござりますから、岐阜でもきよすでも、さあもう今にあ  
けちが寄せて来はせぬかと上を下へのそうどうをいたしておりま  
すと、そのさいちゆうに前田玄以齋どのが岐阜のおしろから城介  
どの、御台やわかぎみをおつれなされて清洲へにげてこられまし  
た。このわかぎみはのぶなが公の御嫡孫にあたらせられる後の中  
納言どの、当時は三法師どのと申し上げてわずか三つにおなりな

され、おふくろさまがたといなば山の居城にいらつしやいましたが、あのものたちをぎふ岐阜に置いてはあやういから早くきよすへ逃がすようにと、城介どの御自害のとき玄以齋どのへ御ゆいごんがござりましたので、玄以齋どのはたゞちにみやこをのがれ出てぎふへまいられ、御自分でわかぎみを抱きかゝえて逃げてこられたのでござります。そうするうちにあけちのぐんぜいは佐和やま長の浜の諸城をおとしいれて江州をいちえんに切りなびけ、蒲生どなたてこもる日野じょうへとりつめてまいりました。勢州からは北畠中将どのがそれをすくおうとおぼしめされ近江路へ打つて出られましたけれども、途中こゝかしこに一揆がおこつてなかゝすゝむどころではござりませんので、一時はまったくどうなることか

とおもつておりますと、やがて三七のぶたか公と五郎ざえものじょうどのと一手になつて大坂へ馳せのぼられ、ひゆうがのかみの聳織田七兵衛どのを討ちとつたと申すしらせがござりました。

ひゆうがのかみもそれをきゝますと日野をあけち弥平次にまかせて十日に坂本へ帰陣いたし、十三日にやまぎきのかっせん、十四日にはもはやひでよし公三井でらに着陣あそばされ、ひゆうがのかみの首としがいとをつなぎあわせて粟田あわたぐち口においてはりつけになされました。さあそのかちいくさのひようばんが又たいへんでござりまして、このかっせんには三七どの、五郎ざえもんの、いけ田きいのかみどの、めんくひでよし公とちからをあわせておはたらきでござりましたけれども、なかんずく秀吉公は毛利ぜ

いとのおつかいをさつそくに埒らちあけ、十一日の朝にはあまがさきへとうちやくあそばされまして、そのかけひきのすみやかなることとはまことに鬼神をあざむくばかり。ひゆうがのかみは最初すこしもそれをしらずにやまざきへじんを取りましたが、のちにひでよし公ちやくじんとときゝましてあわてゝにんずをたてなおしたと申します。そんなしだいで自然ひでよし公がそうだいしようにおなりなされかようにじんそくにしようぶが決しましたので、にわかにおいせいがりゆうくとして御一門のうちに肩をならべるものもないようになられました。

きよすのおしろへもおいゝかみがた上方から知らせがまいりまして、まあともかくもひとあんしんとみなくよろこんでおられました

が、そのうちにおんこの大名小名がたがだん／＼に駈けつけて来られました。もうその時分、あづちのおしろはあけちの余類が火をつけて焼いてしまいましたし、ぎふにはどなたもいらつしやいませんし、なんと申しても清洲がもとの御本城でござりまして三法師ぎみもいらつしやることとでござりますから、まず一往はどなたもこゝへ御あいさつにおこしなされます。わけてもしゆりのすけ勝家公は越中おもてゝほんのう寺の変事をおきゝなされ、かげかつ公と和睦なされていそぎ<sup>とむら</sup>吊いがつせんのためみやこへ上られますところ、はやくも日向守うちじにのよしを柳<sup>やな</sup>ヶ瀬において御承知あそばされまして、それよりたゞちにこちらへおいでなされました。そのほか北ばたけのぶかつ公、三七のぶたか公、丹羽

五ろぎえものじょうどの、いけだ紀伊守どの御父子、はちや出羽守どの、筒井じゅんけいどのなど、十六七日ごろまでにみなさま御あつまりでござりまして、ひでよし公も京都において亡君のお骨をひろわれましてから、いったん長浜の御本領へおたちよりあそばして、ほどなくおこしなされました。のぶなが公御在世のみぎりは、きよすより岐阜、ぎふよりあづちと御本城をおすゝめあそばされ、めつたにこちらへおかえりなされますこともござりませず、ながいあいだひっそりいたしておりましたので、かくおれきくの御けらいしゆうがおそろいあそばすのはほんとうにひさしぶりでござりました。それに柴田どのをはじめ先君せんくんと御苦ろうをともになされました旧臣のかた／＼がいまではいずれも

一国一じょうのおんあるじ、おおきは数ヶ国の大々名だいくみょうにおなりなされ、きらをかざり美々しき行列をしたがえて引きもきらずに御ちやくとう《着到》なされますので、御城下はきゆうにこんざついたしましたして、しめやかなうちにもたのもししい気がいたしたことでござります。

さて御城内におきましては、十八日からひろまにおより合いなされまして御ひようじょうがござりましたが、くわしいことは存じませぬけれ共、亡君のおん跡目相続のこと、明地闕国あきちけつくの始末についての御だんごう《談合》らしゆうござりました。それが何分にも御めいゝに御りようけんがちがいますことゝて、なかゝままとまりがつきませんで、引きつゞき毎日のように夜おそくまで

おあつまりなされ、ときにははけんかこうろんにも及ばれましたときいております。まあじゆんとうに申しますれば三法師が御嫡流でいらつしやいますけれども、御幼少のことでござりますから、いまのばあいは北畠どのおあとへすえようと仰つしやる方々もござりますし、そんなことで何や彼やとむずかしくなつたのでござりましょう。しかしけつきよく御家督の儀は三ぼうしぎみにきまりましたものゝ、柴田どのとひでよし公とがはじめから折りあいがあしく、こと／＼にあらそわれたようでござりました。それと申しますのが、秀吉公はこんどの功勞第一のお方でござりまして、ない／＼こゝろをお寄せなさるかた／＼がおられますところに、かついえ公はお家の長老でいらつしやいますから、御

連枝さまをのぞいてはいちばんの上席におつきあそばし、万事につけて列座の衆へ威をふるおうとなされます。ことに御知行おちぎようわりにつきかついえ公せんだん《専断》をもつて秀よし公へ丹波のくにをおあたえなされ、御じぶんはひでよし公の御本領たる江州長浜六まんごくの地をおとりなされましたのが、双方の意趣をかめるもとなつたと申します。なれどもこれはまあおもてむきでござりまして、まつたくのところは、御兩人ながら小谷の方に向けそうしておいでなされ、どちらもおくがたをわが手に入れようとあそばしたのが事のおこりかとぞんじます。

これより先にかついえ公は、きよすにおつきなされますとおくがたへお目どおりあそばされましてねんごろな御あいさつでござり

ましたが、そのうち三七どのへみつゝにおたのみなされましたとみえ、或る日三七どのおくがたの御殿へおこしなされましたか  
ついえ公へ御さいえんの儀をおすゝめなされたらしゆうござります。  
おくがたも、そこはなんと申しましてもおん兄ぎみにたよつていらつしやいましたことゆえ、御ぞんしようのうちこそおにくしみもござりましたけれども、やはり今となりましたはひとかたならずおなげきあそばし、むかしのうらみもおわすれなされてひたすら御えこうをつとめていらつしやいました折柄、このさき御自分の身はともかくも、三人のひめぎみたちのゆくすえをおもわれますと、だれをちからになされてよいか途方にくれていらしたのでござりましょう。さればかついえ公の浅からぬこゝろをお

きゝになりまして、にくからずおぼしめしましたか、まあそれほ  
どでないまでも、あながちおいやではなかつたらしゆうござりま  
すが、一つには徳勝寺でんさまへみさおをおたてなさりたく、一  
つには小谷どの、後室<sup>こうしつ</sup>としておだ家の臣下へおくだりなされま  
すことゆえ、そのへんのおかんがえもござりまして、さしあたり  
とこの御ふんべつもつかずにいらつしやいましたところ、ほど  
なくひでよし公よりもおなじおもいを申しこされたようにござり  
ます。もつともそれはどなたが仲だちをなされましたか、おおか  
た北畠中将どのあたりでござりましたろうか。なにゝいたせ北畠  
どのは三七どのと腹ちがいの御きようだいでいらつしやいまして、  
どちらも御れんし《連枝》であらせられながらおもしろからぬお

人間柄でござりましたから、一方がかついえ公の肩をもたれましたにつけ、一方がひでよし公のしりおしをなされたのもござりましょう。もとよりふかく立ち入ったことはしかと申しあげかねますけれども、お女中がたがよりくひそくばなしをなされますのを、わたくし小耳にはさみまして、さてはひでよし公、小谷のときよりれんぼなされていらしたのだ、あの時そうとにらんだことはやっぱり邪推ではなかつたわいと、ひそかにおもいたりしましたこととでござります。それにしても十年以来、たえずせんぐんばんばのあいだを往来あそばし、あしたに一壘をぬきゆうべに一城をほ屠ふられるおはたらきをなされながら、そのおいそがしいさなかにあつてなおおくがたのおんおもかげを慕いつゞけて

いらしつたのでござりましようか。昔をいえば身分の高下もござりましたものゝ、このたびやまぎきの一戦に亡君のうらみを晴らされ、あわよくば天下をこゝろがけていらしつたお方のことでもござりますから、いまこそ御執心ごしゆうしんをいろにお出しになりましたものとおもわれます。しかし、ひでよし公はそうとしましても、武強いつぺんのおかたとばかりみえましたかついえ公までがやさしい恋をむねにひそめていらつしやいましたとは、ついわたくしも存じ寄らなんだことでもござります。ひよつとしましたら、これはいろこいばかりではなく、三七どのとしばたどのがしめし合わされ、とくよりひでよし公の御心中を見ぬかれまして、わざとじやまだてをなされたのもござりましようか。まあいくぶんかそ

ういう気味がござりましたかもしれませぬ。

なれどもひでよし公へ御さいえんの儀は、じやまがありませんも  
ありませいでもまとまる道理はござりませなんだ。おくがたはそ  
の御そうだんをお受けになりましたとき、「藤きちろうはわたし  
をめかけ妾にするつもりか」と仰っしゃって、もつてのほかのみけ  
しきでござりましたとやら。なるほど、ひでよし公には朝日どの  
と申すおかたがまえからいらつしやいますから、そこへおかたづ  
きなされましては、いくら御本妻同様と申してもやはりお妾でござ  
ります。それにのぶなが公御他界のゝちとなりましては、小谷  
のおしろぜめのときいちばんに大功をあらわして浅井どのゝ御り  
ようぶんを残らずうばい取ったものも藤吉郎、まんぷく丸どのを

だまし討ちにして串ざしにしたものも藤吉郎、一にも二にも、にくいのは藤きちろうのしわざだと、おん兄ぎみへのうらみをうつしてひでよし公へいしゆをふくんでいらしたかとぞんじます。

まして織田家のおん息女たるお方が、ちかごろきゆうに羽ぶりがよいとは申しながらうじ氏もすじようもさだかにしれぬにわかぶげんしゃ俄分限者のおめかけなどに、なんとしてなられましようや。どうせ一生やもめをおとおしになれぬものなら、ひでよし公よりはかついえ公をとおぼしめすのは御もつともでござります。そういう次第で、まだはつきりと御決心がついたわけではござりませなんだが、うすくそれが御城中へ知れわたったものでござりますから、なおさら御兩人の不和がこう昂じてしまいました。ぜんたいかついえ公の

方には、御自分が亡君のあだをむくいるべきおん身として、その手がらをよこどりされたそねみがござります。ひでよし公には恋のねたみ、りよう地を取られたいこんがござります。されば御列座のせきにおいてもたがいこれを根におもちなされ、一方がこうとおっしやれば、一方がいやそれはならぬと、眼にかどたて、あらそわれまして、御れんし御きようだいをはじめその余のだいまよう衆までが柴田がたと羽柴がたとにわかれるというありさまでござりました。そんなことから、御ひようじょうのさいちゆうに柴田三左えもん勝政どの勝家公をそつとものかげへまねかれまして、いまのまにひでよしを斬っておしまいなされませ、生かしておいてはおためになりませぬとさゝやかれましたけれども、さ

すが勝いえ公は、こんにちわれ／＼御幼君をもりたてゝまいるべきばあいに、どうし討ちをしては物わらいのたねになるからと仰つしやつて、おゆるしにならなかつたと申します。それかあらぬか、ひでよし公も御用心あそばされ、夜中やちゆうしば／＼かわや厠へ立つて行かれましたところ、丹羽五ろざえものじょうどのお廊下において秀吉公をよびとめられ、天下にのぞみを持たれますならかついえを斬つておしまいなされと、おなじようなことを申されましたが、何しにかれを敵としようぞと、これも御しよういんなさらなかつたそうにござります。なれども長居ながいは無用とおぼしめされましたか、御ひようじようがおわりますと、夜半やはんにきよすをしのんでおたちのきあそばされ、みの／＼に長松をすぎてながはまへ

おかえりなされまして、一旦は無事におさまりましたことこゝろでま上すり

そのうち三法師ぎみは安土へおうつりなされまして、はせ川丹波守どの、まえだ玄以齋どのがお守り申し上げ、御成人のあかつきまで江州において三十万石をお知ちぎよう行あそばし、きよすのおしろには北畠ちゅうじょうどの、岐阜には三七のぶたか公がおすまいあそばすことになりました、大名しゅうもみなくかたく誓紙をかわされ御帰国におよばれましたが、おくがたの御さいえんの儀がさだまりましたのはそのとしの秋のすえでござりました。この御えんだんは三七どの、おとりもちでござりますから、おくがたはきよすより、かついえ公はえちぜんより岐阜のおしろへおこし

なされ、かの地において御祝言がござりまして、それより御夫婦御同道にて姫ぎみたちをおつれあそばし、ほつこくへおくだりなされました。その前後のことにつきましては、人によつていろ／＼に申し、さま／＼なうわさがござりますけれども、わたくしはそのみぎりお行列のなかくわゝりましてえちぜんへお供いたしましたことゝて、あらましは存じております。当時、ひでよし公がこのお輿こしい入れのことをきゝおよばれ、かついえ公をえちぜんへかえさぬと仰つしやつて長浜へ御出陣あそばされ、おとおりを待ちかまえていらつしやると申す取り沙汰がもつぱらでござりましたが、いけだ勝入齋どのゝおあつかいにておもいとまられましたとも、またそんなことは根もない世上の風説であつたとも申し

ます。もつともひでよし公の御名代として御養子羽柴秀勝公ぎふのおしろへおこしなされ、御祝儀を申しのべられまして、このたび父ひでよしこと、さしさわりのため参賀いたしかねますについては、追つて柴田どの御帰国のさい路次においておまち申しあげ、おんよろこびのしるしまでに一こんさしあげたくと、そういう御口上でござりましたので、かついえ公もこゝろよく御承引なされ、ひでよし公の御饗応をおうけあそばすおやくじょうになっておりました。しかるところ急にえちぜんよりお迎えのかた／＼がにんずを引きつれて駈けつけて来られました、何かもの／＼しい御そうだんがござりましたが、秀勝公へは使者をもつておことわりにおよばれ、夜中やちゆうにわかには北国おもてへ御ほつそくなされまし

た。さればひでよし公の御けいりやくがござりましたかどうか、  
わたくしのぞんじておりますところは右のとおりでざります。

それにしても、おくがたはどのようなおこゝろもちで御下向ごげこうなさ

れましたか。とかく再縁となりますと、いくらおりっぱな御こん

れいでもさびしい気がするものでござります。おくがたも浅井家

へおこしいれのみぎりは儀式ばんたんきらびやかなこととでござり

ましたろうが、いまはおとしも三十をおこえなされ、かずくの

御くろうをあそばしたすえに、三人の連れ子をとみなわれて雪ふ

かき越路こしじへおもむかれるのでござります。それが、またどうした

いんねんか、おみちすじまでが此のまえとおなじえきじ駅路をたどつて

せきがはらより江北の地へおはいりなされ、なつかしいおだ小谷にの

あたりをおとりになるではござりませんか。けれどもこのまえ  
 はえいろく十一ねん辰どしの春だったそうでござりますが、こん  
 どはそれより十五六ねんのとしつきをすぎ、秋とはいいながらも  
 う北国はふゆの季節でござります。まして夜やちゆう中にあわたゞしい  
 御しゆつたつでござりましたから、なんの花やかなこともなく、  
 中にはまた、ひでよし公のぐんぜいが途中でおくがたをいけどり  
 に来るなど、あらぬうわさにまどわされておさわぎになるお女  
 中がたもおられました。のみならず道中のなんじゆうなこと、申  
 したら、おりあしくいぶき伊吹おろしがはげしく吹きつけ、すゝむに  
 したがってさむさがきびしく、木の本柳ヶ瀬あたりよりみぞれま  
 じりのあめさえふつてまいりけん嶮そな山路に人馬のいきもこおる

ばかりでござりまして、ひめぎみたちや上臈がたのおこゝろぼそさはさぞかしとさつせられました。わたくしなども旅にはわけて不自由な身でござりますからつらさはひとしおでござりましたが、しかしそんなことよりは、このさむぞらに山また山をおこえなされて見もしらぬ国へおいであそばすおくがたのさき／＼をおあんじ申し上げ、なにとぞ御夫婦仲がおんむつまじくまいりますように、このたびこそは幾いくひさしく久敷お家もさかえ、共とも白髪しらがのすえまでもおそいとげなされますようにと、たゞそればかりをおいのり申しております。なれども、さいわいなことにかついえ公はおもいのほかおやさしいおかたでござりまして、亡君のいもうとごということをおわすれなく御たいせつにあそばされましたし、人

の恋路をさまたげてまでおもらいなされたゞけあつて、ずいぶん  
かあいがつてお上げなされましたので、北の庄のおしろにつかれ  
ましてからは、おくがたも日々打ちとけられ、殿のおなさを  
しみ／＼うれしゅうおぼしめしていらつしやいました。そうい  
う風でおもてはさむくとも御殿のうちはなんとなく春めいたこゝ  
ちがいたし、まあこれならば御えんぐみあそばしたかいがあつた  
と、しも／＼の者も十年ぶりであれいのみゆをひらきましたの  
に、それもほんの束の間でござりまして、もうその年のうちにか  
つせんがはじまつたのでござります。

最初、かついえ公は此の中の<sup>じゆう</sup>ことを水にながして仲直りをなさろ  
うとおぼしめされ、御こんれいがござりましてから間もなく、の

ちの加賀大納言さま利家公、不破の彦三どの、かなもり五郎八どの、ならびに御養子伊賀守どのをお使者になされてかみがたへおつかわしになり、ほうばい同士矛盾むじゆんにおよんでは亡君の御位牌にたいしてももうしわけなくぞんずるゆえ、こんごはじっこんにいたしたいと申されましたので、そのときはひでよし公もたいそうおよろこびあそばされ、それがしとても同様に存じておりましたところ、わぎくおつかいにてかたじけのうござります、しゆりのすけどののは信長公の御老臣のことでもござれば、なんで違背いはいいたしましたしうや、これからは万事おさしずをねがいますと、れいのとおり如在じよさいない御あいさつでござりまして、お使者のかた／＼を至極にもてなされておかえしになりました。それで殿さ

まがたは申すまでもなく、わたくしどもまでも御両家おんわぼくの儀をうかゞいまして、もうこのうえはいやなしんぱいもなくなるであろう、おくがたのおん身にもまちがいはなからうと、ほつとむねをなでおろしておりますと、それから一と月とたちませぬうちに、ひでよし公すうまん騎をひきいて江北へ御しゆつじんなされまして、ながはまじようを遠巻きになされました。なんでもこれには仔細のありましたことらしく、ひでよし公が北の庄のごけいりやくの裏をかゝれたのだと申すおかたもござります。なぜかと申しますなら、ほつこくは冬のあいだは雪がふこうござりまして、ぐんぜいをくり出すことができませぬから、とうぶんは和ぼくのていにとりつくろい、らいねんの春ゆきどけを待つて岐阜

の三七どのとしめしあわされ上方へせめのぼるように、御そうだんがとゝのつておつたのだと申すことでござります。まあどちらがどうやらわたくしどもにはわかりませぬが、当時ながはまには御養子いがかみどのがこもっていらつしやいましたのに、ひごろ勝家公にたいしうらみをふくんでおられましたよしにて、たちまち羽柴がたに同心なされ、おしろをあけわたしてしまわれまして、たので、上方ぜいはうしおのごとくみのゝくにゝらんにゆういたし、岐阜のおしろにせめよせたのでござります。北の庄へもしきりに知らせがまいりまして、櫛の齒をひくような注進でござりますけれども、十一月という極寒の折柄、そとはいちめんのおおゆきでござりまして、かついえ公はまいにちくちおしそうに空をお

にらみあそばされ、おのれ、猿めがだましおったか、この雪でさえなくば、わが武略をもつて卵を石になげるよりもやすく上方ぜいをもみつぶしてくれようものをと、お庭のゆきをさん／＼に蹴ちらして齒がみをなされますので、おくがたははらく／＼あそばしますし、おそばの者はおそろしさにふるえあがるばかりでござりました。羽柴がたのぐんぜいはそのまに破竹のいきおいをもつてみのゝくにをたいはん切りなびけ、岐阜をはだかしろにしましたのがわずか十五六にちのあいだのことでござりまして、三七どのもよぎなく丹羽どのおたのみなされ降参を申し出られましたところ、なにぶん先君の御連枝ごれんしのことでござりますから秀吉公もかんにんあそばされ、しからば御老母をひとじちにいたゞきます

と仰つしやつて、おふくろさまを安土のおしろへおうつし申し、かちどきをあげて上方へお引きとりなされました。

そうこうするうちに天正じゅうねんのとしもくれまして正月をむかえましたけれども、ほっこくはまだかんきがはげしく、雪は一向にきえそうもござりませぬし、かついえ公は「小癩な猿めが」と仰つしやるかとおもえば、「にくらしい雪めが」と雪を目のかたきにあそばされ、いらくなされておられますので、初春の御祝儀も型ばかりでござりましてそれらしい気もいたしませなんだ。ひでよし公の方では、この雪のあいだに柴田がたの大名しゅうを御せいばつなさるおぼしめしとみえ、年があらたまりますとふたゝびたいぐんをもつて勢州へ御しんぱつなされまして滝川左近将しょう

監<sup>げん</sup>どの、御りようぶんを切り潰され、しきりにかつせんのさいちゆうと申すしらせがござりました。さればほつこくも今はしずかでござりますけれども、雪がきえしだいかみがたぜいとの取り合いになるのは必<sup>ひつじよう</sup>定でござりますので、おしろの中はその御用意にいそがしく、みなさまがそわ／＼しておられます。わたくしなどはこんなばあいになんのお役にもたちませぬから、手もちぶさたにしよんぼりといたして炬ばたにすくんでおりましたが、それにつけてもあけくれむねをいためますのは、おくがたのことでございます。あゝ、ほんとうに、このありさまではおち／＼殿さまとおものがたりをあそばす暇もないであろう、せつかくおちつかれたのにこのようなことになるのだったら、きよすにいらし

った方がよかつたかもしれない、どうか味方が勝つてくれ、ばよ  
いが、またしてもこのおしろがし修羅ゆらのちまたと化して小谷のよ  
うなまわりあわせになるのではないかと、そうおもうのはわたく  
しばかりでなく、お女中がたもよるとさわるとそのはなしでござ  
りまして、いや、それでもまさかうちのとのさまがお負けに  
なることはあるまいから、とりこしくろうはせぬものだなど、  
たがいになぐさめあつておりましたことでござります。

すると、ちようどこのおりからに、ある日きようごく高次公がお  
くがたをたよつて北の庄へにげていらつしやいました。むかし、  
きよすにおいでなされたころは御元服まえでござりましたが、い  
つのまにかおりっぱな冠かじや者におなりなされ、世が世ならばもうい

まじぶんはひとかどのおんたいしようでござりますけれども、のぶなが公の御おんにそむいてぎやくぞくこれとう日向守の味方をなされましたばかりに天地もいれぬ大罪人におなりなされ、ひでよし公の御せんぎがきびしく近江のくにをあちらへのがれこちらへのがれしておられましたところ、このたび江北がさわがしくなるにつれていよく身のおきどころがなくなれまして、ぎりの伯母御のおそでにすがろうとおぼしめしたのでござりましょう。わずかにひとりふたりの供をつれられて、みのかさにすがたをかしくしおおゆきのなかを山ごしに逃げていらつしやいまして、おしろへおつきなされたときは見るかげもなくおやつれなされていらしたと申すこととござります。それからおくがたの御前へ出ら

れまして、「おそれながらおちう落人どの身をかくまつてくださりませ、わたくしのいのちを生かすもころすも伯母うえのおこゝろひとつでござります」と申されましたが、おくがたはその御ようすをつく／＼と御らんあそばし、「そなたはまあ、あさましいことをしてくれました」とおっしゃったきり、しばらくなんのおことばもなく、たゞおんなみだでござりました。しかしそのゝちどいう風にかついえ公へおとりなしをなされましたか、ほかならぬおくがたのお口ぞえでござりますし、あけちのざんとうとは申しながら、ひでよし公に追われて来たというところに、とのさまもふびんをおかけなされましたか、ではまあゆるしてつかわそうと仰っしゃりまして、おしろにすまわせておかれました。たかつ

ぐ公がおはつどのと内祝言をなされましたのはこのときのござりまして、わたくし、それにつきましては、うそかほんとうか、或るお女中からおもしろいはなしをうかゞっております。と申しますのは、たかつぐ公のおのぞみはやはりお茶々どのでござりましたけれども、お茶々どのが「浪人ものはいやです」と仰つしやつておきらいなされましたので、不本意ながらおはつどのをもらわれたのだそうでござります。いったいおちやくごりようにん御料人はおちいさいときから氣ぐらいのたかいところがありません、ことにはやくよりおふくろさまのお手一つで成人なされましたせいか、なか／＼わがまゝでいらつしやいましたから、そのようなこともおつしやつたであろうとおもわれますが、「浪人もの」と

あなどられた高次公はさだめし御むねんでござりましたろう。のちにせきがはらのかつせんのみぎり、かんとうがたへうらぎりなされましたのも、このときのちじよくをおわすれなく、淀のおんかたへうらみをふくんでいらしたからではござりますまいか。こんなことも邪推でござりましようけれども、もとく北の庄へ逃げていらつしやいましたのが、伯母御にたよられるというよりも、きよすのころにおみそめなされたお茶々どのをしたわれて来られたのかとさつせられます。そうでなければ、若狭の太守武田どのには実のいもうと御がかたづいていらつしやいましたのに、なにしにえちぜんへおいでなされましょう。こちらのおくがたは伯母御と申しても義理のおんあいだから、ことにいまではさいえ

んのお身のうえと申し、あけちのよるいとして柴田どのをたよられるすじはないのみか、ひとつまちがえばさらしくびにもなりかねませぬ。それをおかして、あのゆきのふるなかをこちらへ逃げていらつしやいましたのは、筒井づゝのむかしこいしく、おちや〜どのゆえにいのちをまとになされましたか、まあそのへんでござりましたろうが、せつかくそれほどのおのぞみがあだになりましたのは笑しょうし止のいたりでござります。さればもと〜おはつどのおもらいなさるおぼしめしはござりませなんだのに、ときのはずみでそうなのでござりませうか。もつともこのおりはまだいいなずけのおやくそくばかりでござりまして、御しゆうぎと申しましてもほんのうちわのおさかずきだけでござりました。

さわがしいなかにもこんなおよろこびのありましたのが正月のすえか二がつのはじめでござりまして、もうそのころには佐久間げんぼどのがかついえ公のせんぼうとして二まんよきをしたがえられ、のこんのゆきをふみしだいて江北へ打って出られました。ひでよし公は伊勢の御陣よりながはまへはせつけられますと、あくるあさはやく足輕にすがたをかえられ、十人ばかりの古老をめしつれて山の上へおのぼりなされまして、柴田がたのとりでくくをくわしく御らんになりましたが、あの様子ではとてもたやすくやぶれそうもないぞ、味方もせい／＼しろをけんごにこしらえてきな気永にかゝるよりしかたがないと仰つしやつて、そなえをきびしくあそばされ、きゆうにはおせめなさりませなんだ。それで双方

たいじんのまゝ三月がすぎ、四がつになりましてからいよくとのさまもやながせ表へ御発向でござりました。もはやほつこくもさくらのはながちり春のなごりのおしまれる季せつでござりました、おこしいれのゝちはじめての御しゆつじんでござりましたから、うちあわび、かちぐり、こんぶなど、おくがたはことにころをこめておさかなの御用意をあそばし、御主しゅでん殿でんにおいてかどでをおいわいなされました。かついえ公はごきげんよく御酒ごしゆをまいられ、たゞ一戦にてきをほろぼし藤吉郎めのくびを取つて、月のうちにはみやこへのぼつてみせようぞ、かならず吉左右きつそうを待つておられよと仰つしやつて、それより中門へたちいでられ、おくがたもそこまでおみおくりなされましたが、そのときとのさまが

門のほとりに弓杖をついておたちなされ、お馬にめそうとなされ  
ますと、お馬がいなゝきましたので、おくがたのおかおいろが  
わつたと申すことでござります。なれども、このおり、岐阜にお  
いては三七どのがふたゝび上方をてきになされて柴田がたに内応  
あそばし、やまとの筒井じゅんけいどのも日ならずうらぎりをな  
さる手筈がきまつておりましたそうでござります。それにひでよ  
し公はちりやくこそすぐれておられましたけれども、武勇にかけ  
てはかついえ公の方にばつぐんのほまれがござりましたし、わけ  
て織田どの、御家老として大名がたも帰服いたされ、としいえ公  
はじめ佐久間、原、不破、金森のかた／＼など、たのもしき弓  
取りたちをしたがえておられましたことゝて、たれがあれまでの

はいぐんになろうとおもいまししょうや。やながせ、しずがたけの  
かつせんの始終は三さいの小しょうに児までも知つてゐることでござり  
ますから、いまさら何を申しましようなれども、かえす／＼も  
くちおしゆうござりますのは玄蕃どの、御油断でござります。あ  
のときかついえ公のことばをきかれさつそくおひきとりなされま  
して、そなえをかためていらつしやいましたら、そのうちには順  
慶どのも打つて出られます、美濃の味方もうしろをつきます、そ  
うなつてくればどうなるいくさともわかりませなんだが、御本陣  
より馬上のおれき／＼を七たびまでも使者にたてられ、きつとお  
いさめなされましたのに、叔父上はもうろく耆してゐるなど、申さ  
れて一向おき、いれになりませなんだので、さしもの大軍も藤次らっし

もなく、ずれてしまいました。それにしても御本陣とあの砦とりでのあいだはまわりみちをしましても五六里、まつすぐにまいればわずか一里でござります。かついえ公はたいそう御りつぷくなされたそうでござりますが、それほどならばなぜ御自分でひとはしりあそばされ、げんぼどのを引つたて、来られませなんだか、いつものはげしい御氣しようにも似合わぬこととござります。もうろくと申すほどでなくとも、うつくしいおくがたをおもらいなされてやはりいくらかこゝろがのびていらつしやいましたか。わたくしまでがあまりの無念さに、ついこんなあくたいを申してみたくなるのでござります。

北の庄では卯月廿日うづきにさくま玄蕃どのがてきのとりでを攻めおと

され、なかゞわ瀬兵衛尉どの、首を討つたと申すしらせがござり  
 まして、たいそうおよろこびあそばされ、さいさきよしとおぼし  
 めしていらつしやいますと、江北の方ではその夜やちゆう中に美濃路よ  
 りつゞく海道すじや峰々山々にたいまつのみかりがあらわれて廿  
 日の月しろをくらますほどに空をこがし、しだいに万燈会まんどうえのご  
 とくおびたゞしい数になりました、ひでよし公がおおがき大柿より夜ど  
 おしでお馬をかえされたらしく、廿一日のぎようてん暁天にあたって余よ  
 吾ごのみずうみのかなたがにわかにながしく相成あいなり、玄蕃どの、  
 御陣もあやういと申してまいりました。その飛脚のつきましたの  
 が同じ日の未ひつじの刻さがりでござりましたが、そのうちにはや落ち  
 武者がぼつ／＼逃げかえつてまいりまして、味方はそうはいぼく

におよび、とのさまも御運のすえらしいと申すことでござりました。おしろではあまりのことにおどろきあきれ、よもやとおもつておりますと、日のくれがたに勝家公むざんのありさまにて御帰城あそばされ、しばた弥右衛門のじょうどの、小島わかさのかみどの、中村文荷斎どの、徳菴どのなどをおめしになりました、玄蕃もりまさがわがいつけをまもらぬばかりに越度おちどを取ったぞ、それがし一代のこうみようもむなしくなつたが、これも前世のいんがであらうとおっしゃって、いまはおかくこのほどもすゞしく、さすがにとりしずめていらつしやいました。きけば御子息権六どのはどうなされましたか、らんぐんのちまたのことゝて生死のほどもお分りにならず、とのさまもすでに柳ヶ瀬の陣中においてう

ちじになされまるところを、せめておしろへおかえりになつてし  
ずかに御生害あそばしませ、こゝはわたくしがお引きうけいたし  
ますと、毛受勝介どのがたつておすゝめ申しあげましたので、そ  
れではと仰つしやつて五幣のお馬じるしを勝介どにおあずけな  
され、府中の利家公のおしろで湯づけをめしあがられまして、そ  
れよりいそぎ北の庄へ駆け込まれたのでござります。としいえ公  
もお供いたしましたしようと申されて御いっしよにたちいでられまし  
たけれども、しいて御辞退なされまして途中からおかえしになり  
ましたが、またしばらくしてよびもどされまして、その方はそれ  
がしとちがい筑前のかみとかね／＼じつこんにしておられる、  
それがしへの誓約はもはやこれまでに果たされているから、以来

はちくぜんとわぼくして本領をあんどなされたがよい、このほどじゅうの骨おりは勝家うれしくおもいますと仰つしやつてこゝろよくお別れになったと申します。それが廿一日のゆうこくでござりまして、あくる廿二日には堀久太郎どのをせんじんとして上かみが方勢たぜいがひたくと北の庄へおしよせてまいり、ひでよし公もやがてとうちやくなされまして愛宕山のうえより諸軍をさしずあそばされ、おしろをすきまもなく取りまかれたのでござります。

このとき御城内においてはどなたもくこれを最期とおもいきわめたかた／＼ばかりでござりまして、そんなありさまを見ましてもさわぐけしきもござりませなんだ。かついえ公はそのまえの晩に御けらいしゆうをおめしになりました、じぶんはこのしろで

寄せ手をひきうけいまひとつかつせんして腹をきるつもりだから、  
じぶんといっしょにとゞまるものはとゞまるがよいが、おやたちが  
存命のものもあろうし、妻子を置いて来たものもあろう、そう  
いうものはすこしもえんりよにおよばぬから早々に在<sup>ざい</sup>所<sup>しよ</sup>へ引き  
取ったがよい、罪なき人をひとりでもよけいころすことは本意で  
ないと仰つしやつて、いとまを取りたいものには取らせ、人質な  
どもそれ／＼ゆるしておやりになりましたので、おしろにのこ  
りましたにんずはたといわずかでござりましても、みな／＼の  
ちよりも名をおもんずるひと／＼でござります。わけても弥え  
もののじょうどの、若狭守どのなど、おれき／＼の衆は申すもお  
ろかでござりますが、若狭どの、一子新五郎どのは十八歳におな

りなされ、やまいの床にふせつておられましたのに、輿こしにかゝれておしろへはせつけられました、「小島若狭守が男新五郎十八歳因病氣柳瀬表出張せざる也、只今籠城いたし、全忠孝」と大手の御門のとびらに書きつけられました。もつとお若いおかたでは佐久間十蔵どの、これは十五歳でござりました。利家公の躰でいらつしやいましたので、まだ御幼少のことゝ申し、府中のおしろにはお舅さまがおいでゝすから、しのんであちらへおたちのきなされませ、なにも籠城あそばさずとも苦しかるまいとぞんじますと、御けらいがいさめましたけれども、いや／＼、おれは小さいときから引きとられて養育を受けているうゑに莫大な領地をたまわつている、その恩義のあるのが一つ、もしとしいえ利家のえんじやでな

ければ母への孝こうよう養ように生きながらえるみちもあるが、舅きやうのえんに  
 すがつて一命をつなぐのは卑怯だとおもうことが一つ、みようじ  
 をけがせば先祖にたいしてもうしわけのないのが一つ、この三つ  
 の道理に依つてろうじようするのだと申されて、討死のかくごを  
 きめられました。また御ご定じやう番ばんの松浦九兵衛尉ゑいどのは法ほつ華けの信者  
 でござりまして、小しょう庵あんをむすんで上しょう人にんをひとり住まわせ  
 ておかれましてと、その上人もまつうらどのがろうじような  
 さるのをきかれまして、あなたと愚僧げんせとは現世げんせのちぎりがふこう  
 ござりましたから、ぜひ来世へもおともをして報ほう恩おん謝しゃ徳とくいた  
 しましようにと申され、まつうらどのゝとめるのもきかずにおしろ  
 へたてこもられました。それから玄久と申すおひと、これは豆腐

屋でござりました。もつとも以前はかっいえ公のおさな馴染なじみでござりましたが、あるときかつせんにふかでを負いましたについて、このからだでは御奉公もなりかねますからおいとまをいただきます、もうわたくしも武士をやめて町人になりますと申されましたので、「そうか、それならお前は豆腐屋になれ」と仰つしやうて、大豆を年に百俵ずつ下されました。さればこんどもおとまをいたし、来世でおとうふをさしあげるのだと申して、わざくまちかたよりおしろへはいつたのでござります。そのほか舞の若太夫、山口一露齋、右筆ゆうひつの上坂大炊助どの、このかた／＼ものこられました。なかにはみれんなものもおりまして、徳菴どのひとりは柴田どの、法師武者の一人といわれ、文荷齋どのとおなじよう

に世に知られた方でござりましたのに、としいえ公のひとじちをぬすみ出されておしろをにげのび、府中へたよつて行かれましたけれども、不義理な奴だと仰つしやつてとしいえ公もみけしきをそんなぜられ、おちかづけにならなかつたと申します。そのうちこのかたはどうになりましたやら。せけんの人がだれもあいてにしませぬので、たいそうおちぶれて都のまちをさまよつておられた姿を見たものがあるとも申します。そうかとおもえば、村上六左えものじょうどのは、経かたびらを着ておしろにこもつておられましたところ、とのさまのおん姉末森殿ならびに御息女をおつれ申してたちのくようにとの御ごじょう誕がござりまして、余人に仰せつけくださりませと申されましても、いや／＼、これはその方にた

のむ、それが却つて忠義であるぞと仰つしやりますので、よんどころなくおふたかたのおともをいたして竹田の里へ逃げられました。が、二十四日のさるの刻に天守にけぶりのあがるのを見られて、おふたかたと御いっしよに自害しておはてなされました。まあわたくしのおぼえておりますのはこれくらいでござりますが、このかた／＼はそのころもつばらもてはやしたこととでござりまするか、さだめし旦那さまも御存じでいらつしやいましょう。いずれもく、かんばしい名をのちの世にまでのこされました奇特なひとたちでござります。

あゝ、わたくしでござりますか。わたくしなどはおりつばななかた／＼の真似は出来ませぬけれども、せんねんおだにのろうじよ

うのおりに捨てるいのちを生きのびておりましたので、いまさらこのよにおもいのこすこともないとぞんじておしろにとゞまつておりましたものゝ、しようじきを申せば、まだおくがたがどうあそばすともわかりませぬので、そのごせん<sup>御先途</sup>どをみとゞけてからともかくもなろうとおもつておりました。こう申しますとひき<sup>卑怯</sup>ようのようでござりますが、おくがたはこちらへ御えんづきなされましてからまるいちねんにもなりません。おだにのときは六ねんのおんちぎりでござりましたのに、それでもお子たちに引かされてながまさ公とおしきわかれをあそばしたのでござりますから、このたびとてもそうならぬとは限りませぬ。それにしても殿さまからそんなおはなしはないものか。かたきの人質をさえゆるしてお

やりになりながら、御夫婦と申してもみじかい御えんでござりま  
したのに、だいおんのある先君のいもうと御と姪御とを死出のみ  
ちづれになさるおつもりか。それともまた、いとしいおくがたを  
ひでよし公には意地でもわたされぬとおぼしめしていらっしやる  
のか。かついえ公ともあろうおかたが此の期ごになつてめゝしいこ  
ともなさるまいから、いまに何とか仰うつしやるだろうが。と、  
そんなふうにかんがえましたのも、じぶんがたすかりたいとい  
うころではござりませなんだが、いきるもしぬるもおくがたしだ  
いのいのちときめておりましたのでござります。

寄せ手は廿二日のあさ一番どりの啼くころよりおい／＼取りつめ  
てまいりましたが、御城下の町々、かいどうすじの在々所々を焼

きたてましたので、おびたゞしいけぶりが空にまんくといたしまして日のひかりもくらく相成、おしろから四方をながめますと、いちえんに霧のうみのようで何も見えなんだと申します。上方ぜいはこのくらやみをさいわいに、こえをしのばせものおとをころして、おもい／＼に竹たば、たゞみ、板戸などを持ちまして、そうつとちかづいてまいつたらしく、そのうちにそとがすこしあかるくなりましたら、さながら蟻のはいよるがごとくお堀のきわへひたと取りついておりました。城内からはしきりに鉄炮を打ちましてそのへんのできをみなごろしにいたしました。あらてのぐんぜいが入れ代り／＼おしよせてまいりますのをひつしにふせぎましたことゝて、なか／＼けんごに持ちこたえまして、この様子

では左右そうなくやぶられそうもござりませなんだ。そんなぐあいではその日はどちらも手負い死人を出しまして引きとりましたところ、あくる廿三日のあかつき、寄せ手の陣がきゆうに攻めつゞみのおとをひかえてひつそりいたしましたので、何かとおもっておりますと、お堀のむこうに五六騎の武者があらわれまして、「御子息しばた権六どの、ならびにさくまげんばどのを昨夜いけどりにいたしました、おいたわしい儀でござる」とだいおんに呼ばわりましたので、おしろではそれをきくとひとしくみなさまがちからをおとされ、そのゝちはたゞ申しわけに御門をかためておりますばかりで、てつぼうなどもはか／＼しくは打ちませなんだ。わたくし、じつは、そのうちにひでよし公よりなんとかお使いがあり

はせぬか、おくがたのことをいまもおもっていらつしやるなら、きつと、きつと、どなたかお人がみえそうなものだがと、ない／＼それにのぞみをつないでおりましたことでござりますが、あんなのごとくそのときになっておあつかいがござりました。お使者にたゝれましたのはなんと申されるおかたでしたか、お名まえまではわすれましたけれども、お武家ではなくてさる上人がおこしなされたとおぼえております。それでそのおかたの御口上には、ちくぜんのかみこと、昨年以來よぎないしあわせで柴田どのとかつせんにおよび、さいわい武運にめぐまれてこゝまでおしよせてまいりましたが、むかしをおもえば総見院さまにおつかえ申した朋輩のあいだからゆえ、御一命までを申しうけようとは存じませぬ。

しゆりのすけどのにおかせられても、しようはいは弓矢とる身の常、なにごともまわりあわせとおぼしめされてきようまでのいしゆを水にながされ、このしろをあけわたして高野山のふもとへたちのいてくださらぬか。そうすれば三万石のりようぶんをさしあげて一生御扶持おんふち申ししようと仰つしやるのでござりました。なれどもこれはひでよし公の御ほんしんでござりましたかどうか。ちくぜんどのはお市御料ごりようをいけどりにしたくてそろくおくの手を出しおつたと、味方はもとより敵の陣中でさえそんなひようばんが立つたくらいでござりまして、此のおあつかいをまじめにきくものはござりませなんだ。ましてとのさまは、おれにこうさんしろなど、はぶれないなことを申すやつだと、上人にむかつて烈れ

つかのごとくいきどおられまして、勝つも負けるも時の運であるのは申すまでもないこと、それをおのれらにおしえられようか、世が世ならば猿面かんじやめをあべこべに追いつめて腹をきらせしてくれようものを、さくまげんばがおれの云いつけを守らなんだために賤しずヶ岳ヶにおいておくれをとり、猿奴しずにてがらをえさせたのは無念である、たゞこのうえは天守に火をかけて自害をするから最後の様子をのちの世の手本に見ておくがよい、もつとも城には十余年来たくわえておいた玉たまぐすり薬がある、これが燃えたらおびたゞしい死人を出すだろうから、寄せ手はもつと陣をとおくへ引いている、おれはむやくのせつしようをしたくないからそう云うのだ、かえつたらひでよしにきつとそのむねをつたえておけとお

つしやつて、さつさと座を立つてしまわれましたので、お使者もとりつくしまがなくて逃げだされたのでござりました。わたくしそれをきゝましたときは、たつた一つのたのみのつなも切れましてことゝて、うらめしいやらなさけないやらでござりましたけれども、こうなつてはむざんやおくがたのおいのちもないにきまつた、この上は三途さんずの川のおともをしてすえながくおそばにおいていたゞくとしよう、どうか来世はめあきにうまれておうつくしいおすがたをおがめるようになりたいものだ、自分にとつてはそれこそ真如の月のかげだと、そういうふうにかんねん観念のほぞをかためましたら、それが何よりのぜん善ちしき智識になりました、死ぬ方がかえつてたのしいくらいにおもわれて来たのでござりました。

とのさまも、かくなりはてたのはなんともくちおしいしだけ  
れども、いまさらとこう云うにもおよばぬ、しよせんこよいはこゝ  
ろよくさけをくみかわして、あすの夜あけにはしのゝめの雲とも  
ろともにきえて行こうとおっしゃってそれ／＼御用意をあそば  
され、天守をはじめ要所々々へ枯れ草を山のごとくにつみかさね  
ていざといえば火をつけるように手はずをとゝのえられまして、  
さてあるだけの名酒の樽をのこらず持ってまいれとの御ごじょう誼でござ  
りました。そんなしたくをいたしますうちにはや暮れがたにな  
りましたか、てきの陣屋も城中のかくごのほどを見てとりましま  
か、おい／＼かこみをゆるめまして、はるかうしろの方へひきま  
したので、あれ、あのように寄せ手のかゞり火が遠くなつたぞ、

さすがにひでよしはおれのこゝろを知っているなど、世にもすゞしげにおっしやいましたのが、いつものおこえのようではなくて、とうとくきこえましたことでござります。御しゆえんがはじまりましたのは宵の酉とりのこくごろでござりましたろうか。とのさまがたは申すまでもなく、櫓やぐら々へも樽をおくばりなされまして、おさかなには出来るかぎりのぜいをつくせとお料理方かたへお仰せつけられ、けっこうな珍味のかずくをそえられましたので、あちらでもこちらでもおもいくのさかもりになりましたが、わけてもじょうちゆうのひろまにおいては、上段の間のしきがわのうえにとのさまが御座なされまして、おくがたがそれにおならびあそばされ、そのつぎにひめぎみたち、一段ひくいおざしきに文荷さ

いどの、若狭守どの、弥右衛門尉どのなどおれきくしのしゆうが  
 おひかえなされ、まずとのさまよりおくがたへおさかずきでござ  
 りました。奥向きのものもみなくまいれとの有りがたいおこと  
 ばがござりましたので、こしもと衆やわたくしどもまでも御しよ  
 うばんにあずかりましておそばちかくにかしこまつておりました  
 が、どなたもくこよいが最後でござりますから、とのさまをは  
 じめお侍衆はいろとり／＼のよろい鎧よろいひたれ、太刀、ものぐ物具ものぐに派手  
 をきそつていぎをたゞされ、お女中がたもきようをかぎりになれ  
 小とらじと晴れの衣裳をおつけになりました、中にもおくがたは、  
 紅べに、おしろい、かみのあぶらなどひとしおこいぬにおたしなみあ  
 そばし、しろたえのおんはだえにしら白あや綾のおん小袖をめされ、

厚板あついたのきんみがきのおん帯に、きんぎん五しきの浮き模様のあ  
るからおりの襦うちかけ襦うちかけ褌をおひきなされていらしたと申します。と  
のさまはおさかずきを一順おまわしになりますと、「だまってさ  
げばかりのんでおつては気がめいるぞ、明日あすは浮世にひまをあけ  
る身があまりじめくくしていると寄せ手の奴ばらにわらわれる。  
これから夜どおし風流のあそびをして敵のじんやおどろかして  
やりたいものだ」と仰せられましたところに、はやくも遠くのや  
ぐらの方で、ぽん、ぽん、ぽんとつゞみのおとがひゞきまして、

生きてよも

明日まで人のつらからじ

このゆふぐれを訪へかしな

君を千里において

今も酒を飲み

われと心をなぐさむる

と、たれやら舞をまうらしく、ほがらかなうたいがきこえてまいりましたので、それ、あのものたちに先を越せんされたぞ、こちらでもあれに負けるなど仰おつしやつて、「人間五十年、下天げてんのうちをくらぶれば」と御じぶんがまつさきに敦あつもり盛をおうたいなされました。このうたはむかし総見院さまがたいそうおこのみあそばされ、ことに桶狭間おけはざまかつせんのおりにはおんみずからこれをおうたいなされ今川どのをお討ちとりになりましたよしにて、織田家にとつてはめでたいものでござりましたけれども、「にんげん五

じふねん、げてんのうちをくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり、  
一度生を得て滅せぬものゝあるべきか」と、いちどろう／＼たるおこえ  
でいまとのさまがおうたいなさるのをきゝますと、そゞろに先君  
御在世のころのおんことがしのばれ、さだめなき世のうつりかわ  
りになみだかもよおされまして、なみいる勇士のかた／＼もよ  
ろいのそでをしぼられたことでござりました。

それより文荷斎どの、一露斎どのが一番ずつおうたいなされ、ま  
た若太夫どのゝまいなどがござりましたが、そのほかにもなか／＼  
おたしなみのふかいおかたがいらつしやいまして、おさかずき  
のかずのかさなるにつれ、みな／＼この世のまいおさめうたいお  
さめにたつしやな芸を御披露におよばれ、遊興のかぎりをつくさ

れますので、御酒宴の席は夜がふけるほどにぎやかにあいな相成、い  
 つ果てることかわかりませなんだ。そのうちに一人、「梨花りか一枝いっし  
 雨を帯びたるよそほひの、雨を帯びたるよそほひの」と、一座の  
 かた／＼がおもわず鳴りをしずめますような美音をはりあげて  
 うたわれましたのは、朝露軒と申される法師武者でござりました。  
 このおかたはなにごとにも器用でおいでなされ、琵琶、三味線な  
 どもみごとにおひきなされますところから、わたくしもかねてじ  
 つこんにねがっておりますので、ふしまわしのたしかなことは  
 とくよりぞんじておりましたなれども、いまの楊貴妃のうたの文  
 句に耳をかたむけておりますと、「雨を帯びたるよそほひの、太た  
いえき液えきの芙蓉びわうのくれなる、未央びわうの柳みどりのみどりも、これにはいかでま

さるべき、げにや ろくきゆう 六 宮の粉黛の、顔色 がんしよく のなきもことわりや、顔色のなきもことわりや、「と、そうおうたいなされるではござりませんか。もとより朝露軒どのはそんなおつもりではござりません。きいておりますわたくしの身には、おくがたの御きりようをうたつておられるようにしか受け取れませぬので、あゝ、それほどにおうつくしい花のかんばせも、こよいをかぎり ご に散つておしまいなさるのかと、この期になつていまだに未練がきざしてくるのでござりました。すると朝露軒どのは、「あれ、あれにおる座頭はしやみせんを弾きますぞ、おくがたのおゆるしをいたゞいて、あれにいちばんうたわせてごらんなされ」と申されましたので、「弥市、えんりよすることはないぞ」とす

ぐとのさまのおこえがゝりがござりました。さればわたくしとて  
もいまは何をか御辞退いたしましょう、これこそ自分ののぞむと  
ころと、さつそく三味線を手にとりまして、「君ゆゑなみだはい  
つもこぼるゝ」とれいの小歌をうたいました。「いや、いつもな  
がら巧者なものだな、ではそれがしも弾いてみよう」と申されて、  
つぎには朝露軒どのがそのしやみせんをおとりなされ、

滋賀の浦とて

しほはないが

顔の

ゑくぼは

十五夜の月

と、うたわれまますので、わたくしそれをきゝながら、さてもおもしろい文句だわいと存じまして、みゝをすましておりますと、ところ／＼にながいがい合いの手がはいります。朝露軒どのはそのところをいとのおねいろもうるわしくおひきなされましたが、ふと気がつきましたのは、その三味せんのうち二度もくりかえしてふしぎな手がまじっているのでござりました。さようでござります、これはわたくしども、座頭の三味線ひきのもののみなよくぞんじておりますこととでござりますが、すべてしやみせんには一つの糸に十六のつぼがござりまして、三つの糸にいたしますなら都合四十八ござります。されば初心のかた／＼がけいこをなされますときはその四十八のつぼに「いろは」の四十八文字をあてゝ

しるしをつけ、こゝろおぼえに書きとめておかれますので、このみちへおはいりなされた方はどなたも御存知でござりますけれども、とりわけめくら法師どもは、文字が見えませぬかわりには、このしるしをそらでおぼえておりました、「い」と申せば「い」のおと、「ろ」と申せば「ろ」のおとをすぐにおもい浮かべますので、座頭同士がめあきの前で内證おんばなしをいたしますときには、しやみせんをひきながらその音をもつて互のおもいをかよわせるものでござります。ところでいまの不思議な合いの手をきいておりますと、

ほおびがあるぞ

おくがたをおすくいもおすてだてはないか

と、そういうふういきこえるのでござります。これはこゝろのまよいではないか、何しにいまごろそんなことを申されるかたがあるものか、よしやそら耳でないにしてからが、たま〜音おんの組くみ合あわせがしぜんとなつてゐるまでだと、いくたびもおもいかえしておりますうちに、又もや朝露軒どのは、

いかにせん

わがかよひ路の

関守は

関もゆるさず

なかく〜に

と、うたわれるのでござりましたが、これは三味線もまえとはす

つかりちがつておりながら、やはりあの手だけがあいまゝへ挟んであるのでござります。あゝ、さては朝露軒どのは敵方のまわしものか、でなくばちかごろ急に内通なされたのか、いずれにしてもひでよし公のおおせをふくんでおくがたをてきにわたそうとしておられるのだな、おもわぬときにおもわぬたすけがあらわれたものだが、ひでよし公がまだおあきらめにならなんだとは、なんとるつよい恋だったのかと、にわかにはむねをとゞろかしておりますと、「さあ、弥市、いま一曲その方に所望だ」と申されて、ふたゝびしやみせんをわたくしの前へ置かれました。それにしてもこのようなめくら法師をさほどたよりになされるのはなにゆえか。おくがたのためとあらば火のなか水のなかをも辞せぬこゝろ

のおくを、はずかしくも朝露軒どのにいつか見やぶられておりましたことか。もつともわたくし、眼は見えずともお女中がたの中におりまするたつたひとりのおとこでござります。それにかず／＼のお座敷というお座敷、わたり廊下のすみ／＼までも、眼あきよりよく勝手をそらんじておりまして、まさかの時はね鼠ずみより自由にはしれます。おもえば／＼ちよろけん《朝露軒》どのはよくも見込んでくだされしよな、あるにかいなきいのちをながらえていたというのもこういうお役にたてたいからだ、このうえはおくがたをおすくい申す手だてをつくして、かなわぬときはおなじけぶりときえるばかりだと、とつさにしあんをさだめまして、前後のわきまえもなく三味せんを取り上げ、

見せばや

君に

知らせばや

こゝろの中と

袖の色を

とうたいながら、わなゝくゆびさきに糸をおさえて、

けぶりをあいづに

てんしゆのしたえおこしなされませ

と、こちらも合いの手にことよせまして、「いろは」の音をもつておこたえ申したのでござります。もちろんいちぎのかた／＼はたゞわたくしのうたといとゝにきゝほれてばかりおいでなされ、

ふたりのあいだにこんなことばがかわされたとは知るよしもござりませなんだが、そのときわたくしはおくがたをおすくい申すについて、一つのけいりやくをおもいついたのでござりました。と申しますのは、こよいとのさま御夫婦は天守の五重へおのぼりなされてこゝろしずかに御自害あそばし、それより用意の枯れ草へ火をつける手はずになっておりました。されば御自害をあそばすまえに、ころあいをうかゞって火をつけまして、そのさわぎにまぎれて朝露軒どのゝ一味をひきいれましたなら、にんずをもつておふたかたのあいだをへだてることも出来るであろうと、かようにかんがえました次第でござります。

さてもくわたくしは、めしいのうえにせいらい至っておくびよ

うでござりまして、かりにもひとさまをあざむくことはよういた  
しませなんだが、てきがたの間かんじゃ者にかたかたんをいたしておしるに  
火をかけ、あまつさえおくがたをぬすみ出そうとくわだてました  
とは、われながらおそろしいこゝろでござりましたけれども、こ  
れもひとえにおいのちをおたすけ申したいゝちねんゆえでござり  
ますから、つまるところは忠義になるのだとりようけんをきめて  
おりました。そうこういたしますうちに、みなさまおなごりはつ  
きませぬけれども、はつなつの夜のあけやすく、はや遠と寺おでらのか  
ねがひゞいてまいりお庭の方にほとゝぎすのなくねがきこえまし  
たので、おくがたは料りようし紙をとりよせられまして、

さらぬだにうちぬる程も夏の夜の

わかれをさそふほとゝぎすかな

と、一首の和歌をあそばされ、つゞいてとのさまも、

夏の夜の夢路はかなきあとの名を

くもるにあげよやまほとゝぎす

とあそばされまして、文荷さいどのがそれを一同へ御披露におよばれ、「それがしも一首つかまつります」と申されて、

ちぎりあれやすゞしき道に伴ひて

のちの世までも仕へつかへむ

とよまれましたのは、ときに取つて風流のきわみと存ぜられました。それよりいずれも詰め所へおひきとりなされ切腹のおしたくでござりまして、お女中がたやわたくしはおふたかたにおつきそ

い申し上げ、いよ／＼天守へまいりましたことでござります。もつともわれ／＼は四重までお供を仰せつかり、五重へは姫ぎみたちと文荷斎どのばかりをおつれになりましたが、わたくしはいまがだいいじのときとぞんじ、五重へかようはしごの中途までそつとあがつてまいりまして、いきをこらしておりましたことゝて、うえの御様子はもれなくうかゞつていたのでござります。とのさまは先ず、

「文荷、そのへんをすつかりあけてくれ」

と仰つしやつて、四方のまどをのこらずあけさせられまして、

「あゝ、この風はこゝちよいことだな」

と、あさかぜの吹きとおすおざしきに端坐あそばされ、

「うちわのものでいまいちど別れの酒を酌もうではないか」

と、文荷さいどのおしやくをおたのみなされまして、おくがたやひめぎみたちとあらためておさかずきがござりました。さてそれがすみましたところで、

「お市どの」

と、お呼びなされ、

「きょうまでのだんくのころづくしはたいへんうれしくおもいます。こういうことになるのだったら、去年のあきにそなたと祝言をするのではなかつたが、いまそれをいい出してもせんないことだ。ついてはそれがし、いずこまでも夫婦いつしよにとおもいきわめていたけれども、しかしつく／＼かんがえてみるのに、

そなたはそうけんいんさまの妹御であらせられるし、そのうえこゝにいるひめたちは故備前守のわすれがたみのことでもあるから、やはりこれは助ける方が道だとおもう。武士たるものが死んで行くのにおんなこどもを連れるにはおよばぬことだ。こゝでそなたをころしたら、かついえはいったんの意地にかられて義理にんじようをわすれたと、世間のものは云うかも知れぬ。な、この道理をきゝわけてそなたはしろを出てくれぬか。あまり不意のようだけれども、これはよくゝふんべつをしたうえのことだ」

と、おもいがけないおことばでござりまして、そう仰つしやるおむねの中はさだめしはらわたもちぎれるほどでござりましたろうけれども、おこえにすこしのくもりさえなく、よどまず云いきら

れましたのは、さすが剛気のおん大将でござります。わたくしもそれをきゝましては、あゝ、もつたいないことだ、なさけを知るのがまことの武士とはよく云つたものだ、これほどのおかたとも存ぜずにないくおうらみ申していたのは、じぶんこそ下司げすのこんじようだったと、ありがたなみだにかきくれまして、おぼえずおこえのする方を両手をあわせておがみましたが、そのときおくがたは、

「きようというきようになつて、あまりなことをおつしやいます」と、云いもおわらず泣きふしておしまいなされ、

「総見院そうけんいんどの御存生のころでさえ、いったん他家へとつぎました身を織田家のものだとおもつたことはござりませぬ。ましてた

よるべき兄弟もないこんになりまして、おまえさまに捨てられましたら、どこへゆくところがござりましょう。死ぬべきおりに死なゝいと死ぬにもまさるはずかしめをうけますことは、わたくしもしみ／＼おぼえがござります。さればさくねんこしいれをいたしましたときから、こんどばかりはどういうことがござりましようとも、二度とおわかれ申すまいとかくごをいたしております。はかない御縁でござりましたけれども、夫婦として死なしていただゞけますなら、百年つれそうのも一生、半としつれそうのも一生でござりますものを、出て行けとはうらめしいおことばでござります。どうかこればかりはおゆるしを」

と、そうおっしゃるのが、おんかおにお袖をあてゝいらつしやる

らしゆう、とぎれくりに、たえてはつゞいてもれてまいるのでござります。

「しかし、そなた、この三人のひめたちをふびんとは思わぬのか。これらが死ねばあさいの血すじはたえてしまうが、それでは故備前守に義理がたゝないではないか」

と、おしかえして仰つしやいますと、

「浅井のことをさほどにおぼしめしてくださいますか」  
と仰つしやつて、いつそうはげしくお泣きなされ、

「わたくしはお供をさせていたゞきますが、そのおこゝろぎしにあまえ、せめてこの児たちをたすけてやつて、父の菩提をとぶらわせ、またわたくしのなきあとをもとぶらわせて下さいまし」

と仰つしやるのでござりましたが、こんどはお茶々どのが、

「いえ、いえ、おかあさま、わたくしもお供をさせていたゞきま  
す」

と仰つしやいましたので、お初こごとどのも小督こごとどのも、おなじように

「わたくしも〜」と右と左からおふくろさまにおすがりなされ、  
およつたりがいちどにこみあげてお泣きなされました。おもえば  
むかし小谷のときはみなさま御幼少でござりまして、なにごとも  
夢中でいらつしやいましたなれども、いまは末の小ごうどのでさ  
えもはや十をおこえあそばしておいでゞすから、こうなりまして  
はなだめようもすかしようもござりませなんだ。さればずいぶん  
御辛抱ごんぱうづよいおくがたもかあいゝかた／＼のおんなみだにさそ

われてたゞおろ／＼と泣かれますばかりで、わたくし、じつに、十年このかたこんなに取りみだされましたのはついぞ存じませなんだことでござります。それにしましてもおい／＼時刻がうつりますことゝて、どうおさまりがつくだろうかとおもっておりますと、文荷さいどのがひぎをおすゝめなされまして、

「おひいさまがた、御未練でござりますぞ」

と叱るように申されておふくろさまとお子たちのあいだへ割つてはいられ、

「さ、さ、それではおかあさまのおかくごがにぶります」

と、むりに引きはなそうとなされるのでござりました。わたくしはこのありさまをうかゞうにつけ、まだとのさまはなんとも仰つ

しやいませぬけれども、もはやゆうよしてはおられぬところだぞんじ、はしごの下につんでありました枯れくさの束たばをひきぬきましてそれへともしびの灯をうつしました。おりから四重のおへやではこしもとしゆうが死にしようぞくをあそばされいつせいにねんぶつをとなえていらつしやいまして、どなたもきがついたかたはござりませなんだので、それをさいわいにこゝかしこの枯れくさの山へ火をつけてまわり、障子、ふすまのきらいなくもえがらを投げちらしまして、われからけぶりにむせびながら、「火事でござります、火事でござります」とさけびごえをあげました。くさがじゆうぶんにかわきゝつておりましたところへ、五重の窓がすつかりあいておりましたことゝて風が下より筒ぬけに吹きあ

げまして、ぱち／＼ともものゝ干割ひわれるおとがすすまじく、逃げ場にまよわれるお女中がたのうなりごえと悲鳴とがびゆう／＼という火炎かえんのいぶきといっしよにきこえ出しましたが、「やゝ、どのさまのお座所があやういぞ」「御用心めされい、うらぎりものがあります」とけぶりの下よりくち／＼に呼ばわつてあまたのんにんずが駈けあがつて来られました。それからさきは、朝露軒どのゝ一味とそれを防がれるかた／＼とがほのおの中に入りみだれ、たがいにあらそつてせまいはしごを五重へのぼろうとなさるらしく、そのこんざつにもまれましたあちらへこづかれこちらへこづかれいたしますうちに、熱いかぜがさあつとよえんを吹きかけてはまたさあつと吹きかけてまいり、しだいにいきが出来ない

ようになりましたので、おなじ死ぬならおくがたと一つほのおに焼かれないと、しようねつじごくのくるしみの底にもひつしにおもいきわめまして、はしごへ手をかけたときでござりました。

「弥市、このお方を下へおつれ申せ」と、どなたかはぞんじませぬけれども、そう仰つしやつていきなりわたくしの肩の上へ上じょう

臍ろうさまをおのせになりました。「おひいさま、おひいさま、お

ふくろさまはどうあそばしました」と、とつさにわたくしはそう申しましたが、それというのはそのとき背中へおんぶいたしましたのはお茶々どのだということがすぐにわかったからでござります。「おひいさま、おひいさま」と、つゞけてお呼び申しまして、お茶々どののはうずまくけぶりに気をうしなつていらつしやい

まして、なんとも御へんじがござりませなんだが、それにしてもいまのお侍は、なぜ御自分がひめぎみをおたすけ申さずに、めくらのわたくしへおあずけなされましたことか。おおかたそのお侍は忠義一途にとのさまのおあとをしたい、此処を御じぶんの死に場所とさだめておられたのでござりませうか。さすればわたくしとても、おくがたの御せんどをみとゞけずに逃げるという法はないと、そうおもいましたこととでござりますけれども、でもこのお児をおたすけ申さなんだら、さぞやおふくろさまがおうらみあそばすことであろう、弥市、おまえはわたしのたいせつなむすめをどこへ捨て、来たのですと、あの世でおとがめをこうむつたら申しわけのみちがない、こうして背中へおのせ申すようになった

のはよく／＼のえんというものだからと、そんなふうにもかんがえられましたし、それに、わたくし、ほんとうはそんなことよりも、せなかのうえにぐったりともたれていらつしやるおちやく／＼どのゝおんいしきへ臀両手をまわしてしつかりとお抱き申しあげました刹那、そのおからだのなまめかしいぐあいがお若いころのおくがたにあまりにも似ていらつしやいますので、なんともふしぎななつかしいこゝちがいたしたのでござります。まご／＼していただければ焼け死ぬというかきゆうの場合でござりますのに、どうしてそのようなかんがえをおこしましたやら、まことに人はひよんなときにひよんなりようけんになりますもので、申すもおはずかしい、もつたいないことながら、あゝ、そうだった、自分がおしろ

へ御奉公にあがつてはじめておりようじを仰せつかつたころには、お手でもおみあしでも、とんと此のとおりに張りきつていらした。が、なんぼうおうつくしいおくがたでもやはり知らぬまにおとしをめしていらしたのだと、ふつとそうきがつきましたら、たのしかつたおだにの時分のおもいでが糸をくるようにあとからノ、浮かんでまいるのでござりました。いや、そればかりか、お茶々どの、やさしい重みを背中にかんじておりますと、なんだか自分までが十年まえの若さにもどつたようにおもわれまして、あさましいことではござりますけれども、このおひいさまにおつかえ申すことが出来たら、おくがたのおそばにいるのもおなじではないかと、にわかには此の世にみれんがわいて来たのでござります。

こうおはなし申しますと、たいへん長いことぐずぐずいたしておりましたようでござりますが、そのじつほんのわずかのあいだにこれだけのしあんをめぐらしたのでござりまして、そうと決心がつくよりはやくもうわたくしはけぶりのなかをくぐりぬけ、「おひさまをおぶっておりますぞ、道をあけて下さりませ」とだいおんによばわりながら、そこはめしいでござりますからなんのえんりよえしやくもなく人々のあたまをはねのけふみこえて、無二むさんにはしごを駈けおりたのでござります。

しかし逃げたのはわたくしばかりではござりませなんだ。おおぜいのものが火の粉をあびてそろそろつながってはしりますので、わたくしもそれといっしょになって、うしろからえいぐず押され

ながらかけ出しましたが、お堀の橋をこえましたとたん、がらがら、がらと、おそろしいひゞきがいたしましたのは、うたがいもなくてんしゆの五重がくずれおちるおとでござりました。「あれは天守がおちたんですね」と、だれにきくともなく申しましたら、「そうだ、空に火ばしらが立っている、きつと玉ぐすりに火がついたのだ」と、そばをはしっている人がそう申されるのです。「おくがたやほかのひめぎみたちはどうあそばしたでござりませう」とたずねますと、「ひめぎみたちはみんな御無事だが、おくがたは惜しいことをしてしまった」と申されるではござりませんか。くわしいわけはあとで知れたのでござりますけれども、その人とならんでほしりながらだん／＼話をきゝますと、朝露軒ど

のはまつさきに五重へ上つて行かれましたところ文荷さいどのが  
たちまちたくみを見ぬかれまして、「裏ぎり者、何しに来た」と  
いうまもあらず斬つてすてられ、はしごのてっぺんからけおと  
されたと申します。それで一味のかた／＼も気せいをくじかれ  
ましたうえにおい／＼味方の御家らいしゆうが馳せつけてこられ  
ましたので、なか／＼おくがたをうばい取るなどのだんではなく、  
かえつてきりふせられましてやけ死んだものがおおいとのこと  
でござりました。そのおり三人のひめぎみたちはなおもおふくろさ  
まにしがみついていらつしやいましたのを、ぶんかさいどのが早  
く／＼とせきたてられました、「このかた／＼をおすくい申し  
敵のじんやへとゞけたものは何よりの忠義であるぞ」と、むら

るにんずの中へつきはなすようになされましたので、いあわせたものがおひとかたずつお抱き申しあげて逃げたのだそうで、「だからとのさまとおくがたとはあの火の中でじがいなすつたことだろう、おれはそこまではみとゞけなかつたが」と、そう申されるのでござります。「ではほかのひめぎみたちはどこにいらつしやるのです」と申しましたら、「おれたちの仲間が背中に負つてひとあしききにこゝを通つて行つたはずだ。お前のせおっているおひいさまはいちばん強情で、しまいまでおくがたの袖をつかんではなされなかつたのをむりやりに抱きあげて誰かの背中へのせたようだったが、その男はまたお前にわたしして自分は火の中へとびこんでしまった。なか／＼かんしんな奴だったが、あれはおれた

ちの仲間ではなかつたらしい」と申されるのです。いったい「おれたちの仲間」というのはなんのことかとおもいましたら、かみが上<sup>か</sup>方<sup>た</sup>ぜいがおくがたをうけとるために天守のちかくへしのびよつて、ちようろけんどのゝあいずを待つておりましたのだそうで、いま此のところをこんなにぞろ／＼逃げてゆくのは、みんな裏ぎりの一味の者かそうでなければ上方ぜいのひと／＼ばかりなのでござりました。「しかしちくぜんのかみどのはせつかくいくさにお勝ちになつても、めぎすおくがたに死なれてしまつてはなんにもなるまい。朝露軒どのもあんなしくじりをやったのだから御前のしゅびがよいはずはない。どうせ生きてはいられなかつたよ」と、そのおかたはそう申されて、「それでもお前がこのおひいさ

まをおつれ申しているうえはいくらかめんぼくが立つわけだから、おれはおまえにくつついてゆくつもりだ」と、そんなことを云い、手をひかんばかりになされますので、もうさつきからだいぶんつかれてはおりましたけれども、あえぎくいつしよけんめいにはしっておりますと、よいあんばいに敵がたの足軽大将がお乗りものをもつておむかえにまいられまして、とりあえずそれへひめぎみをうつされ、

「座頭、おまえがおつれ申して来たのか」と申されますから、

「さようでござります」

と申して、いちぶしゅうをしようじきにおはなしいたしました

ところ、

「よし、よし、それならお乗りものについてまいれ」

と申されますので、かずくのじんやのあいだを通りまして御本陣へお供いたしました。

お茶々どのはもう御気分もおよろしいようでござりましたけれども、しばらく御きゆうそくあそばされお手当てをおうけになつていらつしやいますと、たゞちにひでよし公が御たいめんの儀を仰せ出だされ、ほかのひめぎみたちと御いっしょにお座所へおよびいれなされました。それはまあよいといたしまして、わたくしまでがおめしにあずかりましたので、おざしきのそとのいたじきにかしこまってへいふくいたしますと、

「おゝ、坊主、おれのこえをおぼえているか」

と、いきなりおことばがかゝりました。

「おそれながらよく存じております」

とおこたえ申し上げますと、「そうか、まことに久しぶりであつたな」と仰つしやつて、

「その方めしいの身といたしてきようのはたらきは神妙であるぞ。とうぎのほうびになんなりとつかわしたいが、のぞみがあるなら申してみろ」

と、おもいのほかの上首尾じょうしゆびでござりますから、わたくしはさながらゆめのこゝちがいたし、

「おぼしめしのほどはかたじけのうござりますけれども、ながね

ん御恩にあずかりましたおくがたにおわかれ申し、おめく〜にげ  
てまいりました罰あたり奴がなんで御ほうびをいたゞけましよう。  
それよりけさの御さいごのことをかんがえますと、むねがいつぱ  
いでござります。たゞこのうえのおねがいは、いま〜でどおりふ  
びんをおかけくださりまして、おひいさまがたに御奉公をつとめ  
させていたゞけますなら、有りがたいしあわせにぞんじます」  
と申しましたら、

「尤ものねがいだ、きくとゞけてつかわす」  
と、さつそくおゆるしがござりまして、

「小谷どのはおきのどくなことをしてしまつたが、こゝにござる  
ひめぎみたちはこれからそれがしが母御にかわつておせわをいた

そう。しかしいずれもずんと大きゆうなられたものだな。むかしそれがしの膝のうえに抱かれていたずらをなされたのは、たしかお茶々どのだったとおもうが」

と、そうおっしゃって御きげんよくおわらいなされるのでござり  
ました。

こういうわけでさいわいわたくしは路頭にもまよわず、ひきつゞ  
き御奉公をいたすことになりましたけれども、じつを申せば、わ  
たくしの一生はもう此のとき、天しようじゆういちねん卯月二十うづき  
四日と申すおくがたの御さいごの日におわってしまったのでござ  
りまして、おだにや清洲でくらししましたようなたのしい月日はそ  
の、ちついでめぐつてもまいりませなんだ。それと申しますのは、

てんしゆに火をつけ裏ぎり者のてびきをいたしましたことを姫ぎみたちもおきゝなされましたとみえて、しだいにおにくしみがかゝりまして、なんとなくよそゝしくあそばすようにおなりなされ、とりわけお茶々どのなどは、「この座頭ゆえにおしからぬいのちをたすけられて、おやのかたきの手にわたされた」と、ときにはわたくしへきこえよがしにおっしゃいますので、おそばにつかえておりましたも針のむしろにすわるおもいがいたしましたして、このくらいならなぜあのおりに死なゝかつたかと、たゞもうなきげなく、とりつくしまのない身のうえをかこつようになつたのでござります。もとよりこれも自分が悪事をしでかした罰でござりますて、たれをうらむべきすじもないのでござりますが、いったん死

におくれましたはいまさらお跡をしとうたところでおくがたにあ  
わせる顔もござりませぬから、諸人のつまはじきを受けながら生  
き耻じをさらしておりますうちに、もみりようじも、琴のおあい  
ても、余人に仰せつけられました、もうわたくしにはとんと御用  
がないようになってしまいました。ひめぎみたちはその時分安土<sup>あづち</sup>  
のおしろに引きとられていらつしやいまして、ひでよし公のおこ  
とばがござりましたばかりにいや／＼ながらわたくしを召しつか  
つておられましたので、それを知りましてはむりにお慈悲にす  
りますこともこゝろぐるしく、もはや辛抱もいたしかねまして、  
或る日、こつそりと、おいとまごいの御あいさつもいたさずに逃  
げるようにおしろをぬけて、どこと申すあてもなくさすらい出た

のでござります。

さあ、それがわたくしの三十二のとしでござりました。もつともそのおり都へのぼりまして太閤でんかにおめどおりをねがい、ことの次第を申し上げましたら、一生くうにこまらぬほどのお扶持はいたゞけたでござりましたようけれども、このまゝつみのむくいを受けて世にうずもれてしまおうとおもいきわめまして、それよりきようまで宿場々々をわたりあるいて旦那さまがたの足こしをもみ、またはふつゝかな芸をもつて旅のつれ／＼をおなぐさめ申し、三十余年のうつりかわりをよそにながめてくらしながら、いんがなことにはまだ死にきれずにありますようなわけでござります。そういえばお茶々どのは、あときはあれほど太閤でんか

をおうらみあそばされ、「おやのかたき」とまでおっしゃつていらつしやいましたのに、まもなくそのかたきにおん身をおまかせなされ、淀のおしろに住まわれるようになりましたが、わたくしは北の庄のおしろが落ちました日から、いずれそうなるだろうとおもつていたことでござりました。あのみぎり、ひでよし公はお市どのをうばいそこねてたいそう御みけしき気色をそんぜられたそうでござりますけれども、わたくしが御前へ出ましたときは案に相違いたしましてすこしもそのような御様子になかったばかりか、かえつてあり難いおことばをさえいたゞきましたのは、お茶々どのを御らんなされましてきゆうにおぼしめしがかわつたのでござります。つまりわたくしがほのおの中でかんじましたのとおなじこと

をおかんがえなされましたので、えいゆうごうけつのごころのうちもけつきよくは凡夫とちがわぬものなのでござりましょう。たゞわたくしはいったんのあやまちから一生おそばにおられぬような境涯におちましたけれども、太閤でんかはあのお方の父御ていごをほろぼし、母御をころし、御兄弟をさえ串ざしになされたおん身をもつて、いつしかあのお方をわがものにあそばされ、親より子にわたる二代の恋を、おだにのむかしから胸にひそめていらしたおもいを、とうくお遂げなされました。いったいひでよし公はどういう前世のいんねんでござりましたか、のぶなが公のおん血すじのかた／＼をおしたいなされまして、まだこのほかにも蒲生がもうひだのかみどの、おくがたにのぞみをかけていらしたと申しま

す。このおかたは総見院そうけんいんさまのおんむすめ御でいらつしやいまして、小谷どのには姪御におなりなされ、やはりお顔だちが似ていらしたと申しますから、おおかたそれゆえでござりましたろうか。わたくし、人づてにうかゞいましたのには、せんねん飛驒守どのがおかくれなされましたとき、殿下より御後室さまへお使いがござりまして、おぼしめしをつたえられましたけれども、御後室さまは一向おきゝいれがなく、かえつておなげきあそばしておぐしをおろされましたので、蒲生どのゝお家が宇都宮へおくにがえになりましたのは、そんなことから御前のしゆびをわるくなされたせいだと申します。それはとにかく、あのお茶々どのがおとしを召すにしたがつてふんべつがおつきなされまして、でんか

の御いせいになびかれましたのは、まったく時代ときよじせつとは申しながら、御自分さまのおためにもけつこうなことでござりました。さればわたくしも、淀のおん方と申されるのはあさいどのゝ一の姫ぎみだときゝましたときは、どんなにうれしゅうござりましたことか。おふくろさまがあのようにいつも御苦勞をなされましたかわりに、えいがの春がこのお子にめぐつて来たのだ、どうか此のおかたゞけはおふくろさまのような目におあいなさらぬようと、たといわが身はあるにかいなき世すぎをいたしておりましたも、こゝろは始終おそばにはべつておりますつもりで、そのことばかりおいのり申しておりましたところ、そのうちにわかぎみ御誕生と申すうわさがござりましたので、もうこれでゆくすえまでも御

運は万々歳であろうと、あんどのむねをなでゝいたのでござりました。それが、旦那さまも御承知のとおり、けいちよう三ねんの秋に太たいこうでんかゞおかくれなされ、ほどなくせきがはらのかつせんがござりましてから、またもや世の中がだんゝかわつてまゐりまして、いちにちゝと悲運におなりなされましたのは、なんとということでござりましょう。やつぱりおやのかたきのところへ御えんぐみあそばされましたのが、亡きお袋さまのおぼしめしにそむき、不孝のばちをおうけなされたのでござりましょうか。おふくろさまもお子さまも、二代ながらおなじようにお城をまくらに御生害なされましたのも、おもえばふしぎなめぐりあわせでござります。

あゝ、わたくしも、あの大坂の御陣ごしんのときまで御奉公をいたしておりましたら、お役にはたちませぬまでも、おだにのおしろでおふくろさまをおなぐさめ申しましたように何やかやと御きげんをとりむすび、こんどこそ冥土へおともをいたしておくがたへお詫びを申すことも出来ましたでござりましょうに、あのときばかりはつく／＼我が身のふしあわせがうらめしく、まいにち／＼つぽうのおとをきゝながらやきもきいたしております。それにつけても片桐いち《市》正のかみどのはあのしろぜめに関とう方の味方をなされ、ひでより公と淀のおん方の御座所へむかつて大砲を打ちこまれましたのは、なんというなされかたか。あのお方は、むかし志津ヶ岳のいくさに七本槍のひとりとうたわれ、その時分

からおとりたてにあずかつたのでござりまして、ひでよし公には  
なみくならぬ御恩をうけていらつしやるはずでござります。世  
間のうわさでは、太こうでんかゞ御りんじゅうのみぎりにはあの  
お方をおんまくらべにおよびなされて、秀頼のことをたのんだぞ  
よと、くれ／＼も御ゆいごんあそばされたと申すではござりま  
せぬか。われく／＼のようなにんげんでもそれほど人にたのまれま  
したら義をたてとおすことぐらひはこゝろえておりますのに、あ  
のおかたは、たかい声では申されませぬが、権現さまの御いせいに  
へつらつてとよとみ家豊臣のだいおんをおわすれなされ、おもてに  
忠義をよそおいながらかんとうがたに内通されていらしたので  
ござります。いえ、いえ、それは、どなたがなんと申されましよ

うとも、そうにちがいござりませぬ。理くつはつけようでござりますから、いちのかみどの、御苦心をおほめになるかたもござりましようが、かりにも敵がたの大砲の役をひきうけられて、あろうことかあるまいことか、お主のわかぎみと北の方のいらっしやるところへ玉をうちこむようなおかたが、なんで忠臣でござりましようぞ。うき世をすてためくらあんまにもそのくらいなことはわかりませぬ。それゆえあのときはいちのかみどのが憎にく憎てにく、て、眼さえみえたら、陣中へしのびこんで一と太刀なりとおうらみ申したいとおもったほどでござりました。

にくいと申せば、せきがはらのときに大津でうらぎりをなされました京極さいしようどの、仕打ちなども、はらが立ってなりませ

なんだ。あのおかたはお初御料人ごりようじんと内祝言をあそばしながら、かみがたぜいの攻めよせるまえに北の庄をお逃げなされて、若狭の武田家へたよつていらつしやいましたところ、そのたけだどのもほろぼされましたからは三界にすむ家もなく、木の根くさの根にもこゝろをおいてあちこちさまよつていらつしやいましたのが、よう／＼のことでお詫びがかなつて大名衆のれつにくわえていたゞけたのは、どなたのおかげだとおぼしめます。もとの武田どのゝおくがたが松の丸どのと申されていらつしやいましたから、そのおかたのおとりなしもござりましたろうけれども、何よりも淀のおんかたにつながる御えんがあつたればこそではござりませぬか。いちどは小谷どのゝお袖にすがられ、つきにはそのお子さまのな

さけにたよられ、二度までもあやういゝのちをたすけておもらいなされながら、あの大雪のなかを落ちていらした当時のことをおわすれなされ、だいじのせとぎわにむほんをなされて大坂ぜいのあしなみをみだされとは。あゝ、あゝ、しかし、いまさらそんなことを申したところで仕方がござりませぬ。かぞえたてればくやしいことやうらめしいことはいくらでもござりますけれども、さいしようなどのも、いちのかみどのも、もはやあの世へおいでなされ、権現さまさえ御他界あそばされましたこんにちとなりましては、なにごともしすぎにしころの夢でござります。おもえばくおりっぱなかつた／＼がみなくおかくれなされましたのに、わたくしはこのさきいつまで老いさらばえておりますこととでござり

ましよう。げんき《元龜》てんしよう《天正》の昔よりずいぶんながい世間をわたつてまいりましたので、もう後生をねがうよりほかのことはござりませぬが、たゞこのはなしをいつぺんどなたかにきいていたゞきたかつたのでござります。はい、はい、なんでござります。おくがたのおこえがいまでも耳にのこっているかと仰っしゃいますか。それはもう申すまでもないこと。何かの折におっしゃいましたおことばのふし／＼、またはお琴をあそばしながらおうたいなされましたしょうが唱歌のおこえなど、はれやかなうちにもえんなるうるおいをお持ちなされて、うぐいすの甲かんだかい張りのあるねいろと、鳩のほろ／＼と啼くふくみごえとを一つにしたようなたえなるおんせいでいらつしやいましたが、お茶々ど

のもそれにそつくりのおこえをなされ、おそばのものがいつもきちがえたくらいでござりました。さればわたくしには太閤殿下がどんなに淀のおん方を御ちようあいあそばされましたかよくわかるのでござります。太こうでんかのおえらいことはどなたも御ぞんじでござりますが、そういうふかいおむねのなかを早くよりおさつし申しておりますのは、はゞかりながらわたくしだけでござります。あゝ、わたくしも、あれほどのおかたの御心中を知っていたかとおもえば、かたじけなくも右大臣ひでより公のおん母君、淀のおんかたをこの背中へおのせ申したことがあるかとおもえば、なんの、なんの、この世にみれんがござりましょう。いゝえ、旦那さま、もうじゆうぶんでござります。ついゝたゞきすご

しまして、つまらぬ老いのくりごとをながくとおきかせいたしました。家には女房いえもおりますけれども、おんな子供にもこうま  
でくわしくはなしたことはござりませぬ。どうぞ、どうぞ、こう  
いうあわれなめくら法師がおりましたことを書きとめて下さいま  
して、のちの世の語りぐさにしていたゞけましたらありがとうございます  
ござります。さあ、もうおおさめ下さりませ。あまり更ふけませぬう  
ちにすこしお腰をもませていたゞきます。

おわり

## 奥書

○右盲目物語一卷後人作為の如くなれども尤も其の由来なきに非ず三位中将忠吉卿御代清洲朝日村柿屋喜左衛門祖父物語一名朝日物語に云う「太閤ト柴田修理ト取合ハ其比威勢アラソイトモ云又信長公ノ御妹オ市御料人ノイハレトモ申ナリ淀殿ノ御母儀ナリ近江ノ国浅井カ妻ナリケル云々天下一ノ美人ノキコヘアリケレバ太閤御望ヲカケラレシニ柴田岐阜ヘ参リ三七殿ト心ヲ合セオイチ御料ヲムカエ取オノレカ妻トス太閤コノヨシ聞召柴田ヲ越前ヘ帰スマシトテ江州長浜ヘ出陣云々」又いう「柴田北ノ庄ヘコモラレケ

レバ太閤僧ヲ使トシイニシヘノ傍輩ナリ一命ヲ助ヘシ云々是ハスカシテオイチ御料ヲトラントノハカリコト成ヘシト其沙汰人口ニマチマチナリ」

○佐久間軍記佐久間常関物語勝家祝言の条に云う「浅井長政ノ後室ヲ嫁勝家勝家其息女三人トモニ携越前ニ帰ルノ時秀吉走勝家于使曰於帰国道使秀勝信長四男秀吉養子饌膳祝儀ヲ可賀ト勝家慶テ約諾ス然シテ勝家ノ家人等北庄ヲ発清洲迄ノ行路ニ来迎勝家夜半ニ清洲ヲ出告秀勝曰越前ニ急用アルヲ以テ道ヲカネテ夜半ニ此前ヲ通ル間不能応招云々」

○志津ヶ岳合戦事小須賀九兵衛話には清洲会議を安土に作る、當時「挨拶及相違て柴田と太閤互に怒をふくむ其時丹羽長秀太閤と

一処に寐ころひ有しか長秀そと足にて太閤に心を付太閤被心得其夜大坂へ御かへり云々」佐久間軍記には「秀吉其夜屢小便ニヲクル」とあり然れどもこれらのごと甫庵太閤記等には見え不審也

○蒲生氏郷後室の墓は今京都の百万遍智恩寺境内に在り、寛永十八年五月九日於京都病没、行年八十一歳、法名相応院殿月桂涼心英誉清熏大禅定尼、秀吉此の後室の容顔秀麗なるを知り氏郷の死後迎えて妾となさんとしたれども後室これを聴かず、ために蒲生家は会津百万石より宇都宮十八万石に移さる、委しくは氏郷記近江日野町誌を可見

○三味線は永禄年中琉球より渡来したること通説なれどもこれを小唄に合わせて弾きたるは寛永頃より始まる由高野辰之博士の日

本歌謡史に記載あり尤も天文年中既に遊女の手になされたこと  
室町殿日記に見え好事家は早くより流行歌に用いたる趣同じく右  
歌謡史に委し、此の物語の盲人の如きも好事家の一人たりし歟、  
予が三絃の師匠菊原檢校は大阪の人にして今は殆ど廃絶したる古  
き三味線の組歌を心得られたるが其の中に閑吟集に載せたる「木  
幡山路に行きくれて月を伏見の草枕」の歌長崎のサンタマリヤの  
歌其の他珍しき歌詞少からず予も嘗てこれを聞きたることあり詞  
は短きようなれども同じ句を幾度も繰り返して唄い且三味線の合  
いの手は詞よりも数倍長し曲に依りては殆ど琵琶をきく如き心地  
す

○かんどころのしるしに「いろは」を用いることはいつの頃より

始まりしか不知今も浄瑠璃の三味線ひきは用之由予が友人にして  
斯道に明かなる九里道柳子の語る所也、本文挿絵は道柳子図して  
予に贈らる

于時昭和辛未年夏日

於高野山千手院谷しるす



## 青空文庫情報

底本：「盲目物語」中公文庫、中央公論新社

1993（平成5）年5月10日初版発行

底本の親本：「盲目物語」中央公論社

1932（昭和7）年2月

初出：「中央公論」

1931（昭和6）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：kompass

校正：酒井裕二

2016年3月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 盲目物語

谷崎潤一郎

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>